
コディの泉

天猫 紅樓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴディの泉

【Zコード】

N6998M

【作者名】

天猫 紅樓

【あらすじ】

森の中に佇む城。貪欲な王が妖精『コダマ』を捕獲しようと命令した。

仕える兵のひとり、シーノは、相棒ロツクスと共に捕獲するべく森へと入った。そこで知る『コダマ』の存在。彼らは『ゴディ』と名付けた。

一度は囚われの身となつたゴディだが、シーノが見事に奪還。そしてカリンも加わり、ゴディを慕い守る。

そんな折、クリスという学者があらわれて、『コダマ』を捕獲しよ

うと狙う。

それぞれの思いは「」の信じる道となり、戦いあうことになった。
『歌えば癒し、泣けば水晶、死して泉』……森の妖精『コダマ』の
言い伝えを巡って、様々な人の思いが交錯する。

縁の中にポツンとそびえる城がひとつ。

その外壁に寄り添つように、小さな町が広がっている。

人口三百人ほどのサージヤ国。

近郊の町村とも交流が熱く、ここ最近は戦も無く、皆穏やかに過ごしていた日々は、城主の世代交代によつて脆くも崩れ去つた。

先代の城主、サージヤ王の死により、主は息子のサージヤジュニアが受け継いだのだ。

このサージヤ・ジュニア、かなりの強欲。

幼くして母を病で失くし、家来や召使は大勢いたものの、肉親は父ひとり。

あまりに過保護に育て、家臣たちもそれに習つていたため、とてもワガママに育つてしまつたのだった。

「手に入れたい」と思ったものは、全て思い通りになると思つていた。

好奇心というより、興味だけで手元に置きたいだけ。飽きたら見向きもしない。

「モノは大切にするのだぞ」

という父の言葉にも空返事。

だが政治に強いサージヤ王とて、育児というものに全く無知だつた彼は、黙認するほかになかったのだった。

そんな折、サージヤ王は妻と同じ不治の病にかかり、倒れてしまつた。

近郊からも医師を呼び、あらゆる処置を施したが、その努力

もむなしく永い眠りについてしまつた。

「ジユニアを、頼む」

という言葉を残して……

國葬をするほど、サージヤ王は人々に慕われていた。
豊かで平和な日々を送ることが出来たのは、サージヤ王の努力のおかげである。

人々は皆、サージヤ王を敬い、その死をひどく悲しんだ。
そして、後に残されたサージヤ・ジユニア王の行く末と、この國の行く末を案じた。

人々の思惑通り、サージヤ・ジユニアが國の王になつたことで國の政治力は大きく傾いた。

國交は、先代の残した『信用』という貯金のおかげでしばらくは安泰に過ごせそうだが、今以上に栄えることは皆無だらう。
サージヤ・ジユニア本人、政治には無関心。國に關わる仕事は、家臣たちにまる投げしている状態。むしろ、口うるさい父が居なくなつた事で気が軽くなつたようで、ますます貪欲に輪をかけた。

困つたことに、最近の趣向は『珍品』。

珍しいモノがあると聞くと、すぐに
「持つてこい！」
と命じた。

その為、家来達は遠方まではるばるとその品を求めて走るこ

ともしばしばだった。

存在する物ならばそれで事は治まるのだが、なかにはただの噂でしかない時もある。

そうなると、サー・ジヤ・ジユニア王の機嫌は二日三晩の荒れ模様。

口は利かないわ、手当たり次第にハツ当たりをする……全く、はた迷惑な話である。

誰も彼に忠告をする者は居ない。

そんななか、城に兵士が集められた。

その前で、サー・ジヤ・ジユニア王がにやけた顔をしている。偏食の恩恵を受けてブクブクに膨れ上がった身体は、軽く突けばどこまでも転がるかのよう。

兵士の一人、シーノ・ソラー・オは、その風貌にはあつとため息をついた。

「また、太つたんじゃね？」

すると隣のロックス・ダガーリンがスンッと鼻で笑った。

「また、じゃねーよ。休み無く膨れてんだよ」

「つたぐ、勘弁して欲しいよな。今度は何だよ？」

シーノはふくれつ面で呟いた。

兵士はそんなにヒマじゃない。

サー・ジヤ・ジユニア王（通称ジユニア）が兵を集める時は、何か面白いことを思いついた時だけだ。

戦の飛び火すらも受けない平和な国なので、ジユニアは戦の経験がない。

平和かぶれをしているのだ。

ジユニアは「ソソシと杖を床に打ちつけた。

当然のようすに運動などしないので、もつ杖無しでは歩けない体。

まだ三十歳前だと言つたのに、だ。

「諸君！ よく聞きたまえ！ 我は面白い話を聞いたぞ」

『ああた始まつた……』

シーノは心中であきれている。

それに気づくこともなく、ジユニアは悠々と続けた。

「森には『コダマ』という妖精が居るそつじや。 もちろん、この城の周りの森！ ここにも必ず居ると確信しておる！ 聞けば、その声は人を導くと言つ。 是非その声を聞いてみたいのじや。 と言つより、絶対に聞きたい！だから、我の言いたいことは分かるな？」

無駄に大きな声量が、広間に響く。

兵士達は皆、『またか』という抜けた表情をしている。

「そつじや、頼んだぞ！」

満足げに言つと、杖と家来の助けを借りながら、部屋へと戻つていった。

残された兵士達は、各自にため息をつきながら開放されていく。

く。

シーノもまた、呆れ顔で腰に手を当てた。

その様子を見て、ロツクスはクスッと笑つた。

『ま、しょーがないじゃん』

最近のロツクスは、こんな状況を楽しんでいるようだ。

実際、平和に飽きてきている兵の中には、動ける場所がないという欲求不満から、退屈しのぎに考えている者もチラホラ出ている。

もともと動くことが仕事である。 城でボーッとしているよ

り、外に出ていた方がいい。

軽く鎧をつけながら準備をしているロックスにならって、シーノも仕方なくといった風に剣に手を掛けた。

シーノは細身の体とその足を生かして、動きの担当である。依頼があれば、スパイとして敵の領地に忍び込んで情報を仕入れたり、偵察をしたりもする。

だから長い剣は滅多に使わない。

動きを妨げない程度の軽い衣装と短剣、そして、少しばかりの投げ武器を持つ。

相棒ロックスはというと、シーノが追い込んできた獲物を迎え撃つ担当。

戦闘に出向く時は、何十キロにもなる鎧を身につけ、身の丈ほどの分厚い剣を持つ。

そのため、ロックスの体にはこれ以上ない位に筋肉が付いてガツシリしている。

もちろん、毎日の鍛錬は怠らない。

彼の剣を持たせてもらったシーノが、一瞬よろめくほどだ。そんな彼を見て豪快に笑うロックス。

シーノの一・五倍の体重。

身長も、彼をグワンと見下ろせるほどだ。

だからこそ、シーノは安心してロックスの前に敵を誘い出せるのだった。

追いかけた謎の人影

「さてと、行こうかね」

ズンツと空気が揺らぐ。

バカでかい剣を肩にかけたロックスが、ニッと微笑む。

『準備オッケー』の合図だ。

やがてシーノたちを含む兵士たちはゾロゾロと城の外に出た。城から出るとすぐに町に入る。

民たちは、続々と出かける兵士たちを見て、「今度は何に使わされたのか」と口々にささやいた。

兵士の一人が、それに軽い口調で答えた。

「森へ、コダマを獲りに行くんだ」

その時、誰かが叫んだ。

「い……いかん！ コダマを捕らえてはいけない！」

しげがれた声。

その主は、すっかり腰が曲がってしまっている老婆だった。

「コダマは世界を守つてある！ 捕らえれば、何が起こるか分からんぞ！ この世がどうなるか！」

必死で叫ぶ老婆を、その息子らしき男性がなだめている。

その様子を横目に、シーノたちは森へと歩を進めた。

「いい天気だな」

青空を見上げて、ロックスが嬉しそうに声を上げた。

「妖精捕獲日和つてか」

森の中へと入ろうとするロックスの背を、シーノの声が追つた。

「ゴダマつて、本当に居るのかな？」

ロックスはフンッと鼻で笑うと、顔だけ振り返つた。

「居たら居たで、面白いだろーな」

きっと彼は、そこまで真面目にとらえていないのだろう。だがシーノの心には、さっきの老婆の姿が引っかかっていた。が、あんなのでも、主の命令は絶対だ。たとえそれが可能でも、不可能でも。

兵士たちは黙々と静かな森へと入つて行つた。

もともと生まれたときからそこにある森だ。

当たり前の存在なので、特別な思いは生まれない。

兵士たちは、草むらを分け入つたり木を揺らしたりと、あちこちを探り始めた。

何しろゴダマというものがどういうものなのか、さっぱり分からぬのだ。大きいのか小さいのか、人なのかケモノなのか、見えるのか見えないものなのか……

そんな曖昧な状況で、兵士たちはただ闇雲に森の中を搜索していく。

すじく効率が悪い。

シーノはロックスと共に湖のほとりに座つた。

二人とも、最初から真剣に探す気などない。

勿論、捕まえれば何かしらの報酬はもらえるのだろうが、今までの経験から、噂にただ踊らされていただけといつ場合も何度かあつたのだ。

何か手がかりが見つかった時、宝を横から奪うように手柄を取つてやろう、という軽い気持ちでいた。

シーノが湖をボーッと見ていると、その水面に不自然な波が立つたのが見えた。

「？」

彼は膝をついて、その水面を凝視した。

それに気づいたロックスが不思議そうに言つた。

「どうした、シーノ？」

「シツ！」

言葉を遮るように制止するが、シーノの目は水面を見たままだ。ロックスもその視線の先を見た。

シーノは囁くように言つた。

「今、ヘンな波が立つた」

「波？」

「水面をスーツと一本、何かが滑るよつな……」

「？」

その時既に、シーノが目撃した波は消え、静かな水面に戻つていた。

「何だろ？」

シーノは波が動いた方へ視線を動かした。

そっちの方には、兵士達がワラワラと森の中をつゞめている。

ドクン……

シーノの胸が熱くなつた。

兵士の血がそうさせているのだ。

「ちょっと行つてくるわ」

スクツと立ち上がると、シーノは森の中へと消えて行つた。

あつという間だつた。

残されたロックスはあぐらをかいたまま呆然とし、そして頭をかくと呟いた。

「アッ、血が騒いだな？ ま、好きにさせとくぞ」

身軽に木の枝を飛び伝いながら、シーノは兵士たちが捜索している頭上辺りまで移動した。

その時、同じように木の枝に乗つて下の様子を見ている人影を見つけた。

シーノは自分の気配を消すと、その影に忍び寄つた。

そして背後からそつと声をかけた。

「何やつてる？」

！

その人影は驚いて振り向くと、反動で枝から落ちそつになつた…が、すぐに体勢を整えると他の枝に飛び乗り、そのまま逃げよつとした。

「こら、待てー！」

シーノも条件反射で追いかける。

その影はなんとも素早く無駄の無い動きで、枝から枝へと移動する。

だがシーノにとつてもそれは容易いこと。

この森の中에서도、しょっちゅう訓練をしてくる。

垂れ下がる葉を器用に避けながら追いかけた。

だが、なかなか追いつくことが出来ない。

「ちつ……速いな……」

半ば苛立ち氣味に弦くと、懐から鎌を取り出した。

その両端に鉄の重りが付いている。

それを動きながら器用に持ち替えると、影に照準を定めて投げ放つた。

ブンッ！

「わあっ！」

唸りをあげて飛んだ鎌は、うまく相手の足に絡みついて動きを封じた。

それと共に、相手は見事に地面へと墜落した。

「やりこつー！」

嬉々として自分も降つると、墜落地点へと急いだ。

『「タマ』との遭遇

「なんだ、こいつ？」

そいつを捕まえていたのはロックスだった。

猫のように首根っこを捕まれたソイツは、足に鎖を絡ませたままジタバタしている。

は、離せ～っ！

「？」

二人は同じ事を感じたようだ。

「直接頭に響きやがる」

代弁するようにロックスが言い、空いている方の手で耳を塞ぐ。

シーノはソイツに顔を近づけると聞いた。

「お前が『タマ』か？」

フンッと顔を背けると、口を開いた。

そんなのオマエらにカンケイないだろ？ モリから出でいけ！

そして、今にも噛み付きそうな形相で睨んだ。

大きな目に尖った耳。 身長も低く、体つきはやせた子供のようだが、緑色掛かった皮膚や髪の毛。 あきらかに人間じゃない。 探している『タマ』に違ひなぞうだ。

シーノは腰に手をあてた。

「俺たちはコダマを探している。もし前がそうなら、ここに姿を現すな。分かつたな？」

言い聞かせるよつこひにひつと、足に絡み付いてる鎖を解いてやつた。

「いいのか？」

ロックスは不思議そうに聞いたが、特に答えようとしないシーノを察して、それ以上何も言わずに手を離した。

コダマは離された瞬間にはもう近くの木の枝に逃げていった。そして、数秒一人を見下ろしたあと、消えるように居なくなつた。

「速いな」

「俺でも追いつけなかつた。多分さつきの波も、姿が見えないくらい速かつたんで波だけ立つてたんだ」

シーノはもう誰も居ない木の枝を見上げていた。

「しかしそうかたのか？ 連れて行けば、たんまり褒美がもらえるじゃないか」

「そうだけど、見たところ子供みたいだつたしな。見逃してやつた」

シーノは見上げたまま少し微笑んだ。

「ま、いつか」

ロックスも納得したようだつた。

翌日も、コダマの搜索は続けられた。その翌日も、その翌々日も……

ジユニア王が飽きるまで、兵士たちは従うしかない。しかし森の中をくまなく探したところで、まるで得体の知れない妖精を捕らえるなど、雲を掴んで来いと言われたようなもの。

いち早くそのロダマと接触し、その身を逃したシーノとロックスは、もう再び現れることはないと分かつていたので、毎日を遊んで暮らしているのだった。

ただ森の中へ行つたフリをしては、木々を相手に剣術の訓練をしたり、泉や木の枝に身を預けて時間を潰したり。

そんな数日が過ぎる頃……

いつものようにシーノは森の中をひとり走り回つた後、湖のほとりに寝転がつていた。

相棒ロックスは森の中で剣術の訓練をしている。

太く長い剣を振り回して、落ちてくる木の葉を相手に、大胆かつ纖細な攻撃もできるように訓練をしている。

振り回すなら誰でも出来る。

ロックスはいつも、もっと自分の秘めた力を引き出せるように訓練に余念がない。

シーノは、お互いが足して1以上になれる相手はロックス以外いないと自負している。

だからこそ、このコンビは切つても切れない存在なのだ。

汗がにじんだカラダを冷やすように、ひとり風に当たるシーノ。

見上げれば、透き通つた青空が気持ち良い。

その時、頭上の木の葉が一枚、フワリと舞い降りてきた。

こんな時、考えるより先に体が動く。シーノは素早くその場を離れた。

今シーノが居た場所に、コダマが立っていた。

「踏んづける気かよ？」

驚くよりも焦るシーノに、コダマは詰め寄った。

モリから出て行け！

相変わらず頭に直接響く声だ。

「そんな事言われても、ジュニアが飽きるまでは続けられるよ。俺たちが決めることがじゃない」

困ったよう、シーノはあぐらをかいだ。

「それより、こんなとこに来たら他の奴らに見つかるぞ」

オマエらがなかなか出て行かないからだ！

「コダマは小さな体で必死に叫んでいる。

「うへへん……」

頭をかくシーノ。彼もコダマの言いたい事は痛いほど分かることだが……

「あ、こいつ、また来たのか？」

草むらをかき分けて、ロックスが現れた。 とこり、シーノの元に戻ってきた。

その巨体に驚きながらも、コダマは頭上の枝に飛び乗った。 はつ……早く出でいけ！ 出で行かないと、どうなつても知らな いからなつ！

そう言い残して、コダマは再び姿を消してしまった。

「何しに来たんだ？」

キヨトンとして尋ねるロックスに、シーノはあぐらをかいた姿勢のまま彼を見上げた。

「出でけつて言いに来た」

「あら、ご丁寧に」

そして森の中からは、相変わらず草むらを分け入る兵士たちの物音が聞こえてくる。

風が通り過ぎたように居なくなつたコダマの後には、また変わらぬ光景が何事も無かつたかのように流れている。

それから、次の日も、その翌日も、コダマはシーノたちの前に姿を現し、森から出て行くように警告しに来た。

「もう少ししたら、ジュニアも飽きるから我慢しておけ」

といふシーノたちの声も聞かず、懲りずに毎日姿を現すので、次第に彼らも愛着を持つようになつた。

なにしろ、コダマは何をするわけでもなく、シーノたちの周りでギヤーギヤーわめきながら帰つていくのだ。

やがてシーノたちは、逆にコダマに会うために森へと通うようになつていた。

やがて2人は、コダマの事を勝手に『コディ』と名付けた。

「ゴティ、捕獲される

その日もまた、待ち合わせたかのよひシーノたちの前に姿を現したゴティ。

珍しくシーノの腕をつかむと、グイッと引っ張った。

「何だよ？」

いいから、来いつ！

仕方なくシーノは、
「ちょっと行つてくるわ……」

と、ロックスを残してゴティと共に森の中へ消えていった。

彼は楽しそうに手を振つて送り出しながら弦いた。

「まるで兄弟だな」

森に入ると、ゴティはシーノの腕から手を離し、睨むよひで見上げた。

ついてこいや？

念を押すよひで見上げると、枝伝いに移動し始めたので、シーノも後をついて行つた。

『断る理由も無いしな。 それにしてもゴイツ、身軽だな。 リスか何かみたいに、無駄が無い』

ゴティの後ろをピッタリとくつついて、シーノもまた同じようく木の間を縫つて行く。

やがてゴティはその足を止めると、一本の木を指差した。

その木……といつより樹木という名が似合つむつな巨木は、
周りの普通の木々に比べると数倍の太さをしてくる。

何百年という年月、ここで根を張っているのだろう。重圧さえ感じる。今まで気になったことはなかつたが、広い森の中には知らないことがたくさんあるようだ。

その根元には、今の季節には似つかわしくない程の落ち葉が積もっている。

この瞬間にも、巨木の枝からはハラハラと止め処も無く葉が舞い落ちている。まだ綺麗な緑色の葉ばかりだ。

兵士たちは、そんな葉の雨の中をうろうろしている。

「ババの木が泣いてる

「ババの木？」

「そうだ！ オマエたちがモリを荒らすから、ババの木がクルしんでいるんだ！」

言いながらコディも、悔しそうな顔をしている。

ババの木の心情が流れてくるのだろうか……

グッと唇を噛むと、踵を返した。何も言わず、シーノも後を追つた。

ロックスの元に戻ると、コディは2人に言った。

「分かつただろ？ このままじゃモリが死んでしまう！ テオクレになる前に、早く出ていけ！」

「お前は何もしないのか？」

ロックスがあもむろに言った。彼はシーノとコディがどこへ何をしに行つたのかは分からぬが、コディが言いたいことは大体分かっている。

シーノもハツとして言った。

「やうや。お前は言つばかりで何もしていないじゃないか」

するとコディは地団太を踏んだ。

その姿はなんとも可愛らしい。

やれるもんならしたいさ！ けど、何も出来ないんだ！ シゼンは、自分のイシでダレかを傷つけることは出来ないんだ！ 悔しそうと言つ「ゴーティ。

「ダマは森の精。 自然から産まれた。

悔しいとか怒りと言つ意思があつたとしても何ものにも危害を加えることは出来ず、見守ることしか出来ないのだ。

ならば何故「ダマは存在するのか……？

それはこれからきっと、分かることなのだろう。

「不憫な奴だな。」

ロックスは、可哀相に、と「ゴーティの頭を撫でた。

！

ビックリして田を丸くする「ゴーティ。

な、なつ……！

動搖する姿を見て、ロックスは笑つている。

所詮、田の前の「ゴーティは小さな子供にしか見えないのだ。

しばらく黙つて考えていたシーノ。

ポンと手を打つた。

「な、ゴーティ、捕まつてみないか？」

「？」

ロックスと「ゴーティはシーノを見た。

「俺たちはお前を探してゐる。一度捕まれば、ジユニアも気が済むだろう。 そうすれば森の中にも兵士は来なくなる」

「だが、ゴーティはどうなる？」

心配そうに言つ口ヲクスに、シーノはニッと笑つた。

「それだけ素早さがあれば、何かの折に兵士の手をすり抜けて逃げることだって出来るハズだ。速すぎて姿が見えず、水面に波だけ残つたくらいだからな」

シーノは初めてゴーティの存在に気づいたときの事を思い出していた。水面に波だけが立ち、自分はその空氣で何かの異変を感じた。

あれだけの素早さがあるなら、一兵士の手など簡単にすり抜けられると考えたのだ。

……

ゴーティは黙つてゐる。だが、一生懸命に聞き、考へてゐる。本当に森の為になりたいのだろう。

「ゴーティ、出来やうか？」

……

シーノの田をジッと見つめるゴーティ。

心の奥まで見透かされそつなほど、その瞳に輝きが揺らいでいる。

そして、決心したように大きくうなづいた。
分かつた。やる！

かくして、ゴーティは城へと入ることになった。

石造りの城は、絨毯やタペストリーなど装飾品に囲まれようとも、どこか冷たい感触が付きまとつ。

サーディヤ ジュニア王の前に、ゴーティを引き連れたシーノとロックス。ゴーティはおとなしくついてきている。

サーディヤ ジュニア王は嬉々として田の前に居るゴーティを舐

めるように見つめた。それを気味悪がって視線をそらすゴーティ。

「よし、檻に入れておけ。後でゆっくりと可愛がってやろう」

サーティヤ ジュニア王の言葉に、家来たちがゴーティの横に付
き、シーノたちから引き離した。

ゴーティは不安そうにシーノを見たが、王の手前で大きな仕草
をする訳にもいかず、ただ心の中で

『何とか無事に逃げろよ』
と願うばかりだった。

連れて行かれるゴーティの背を見ながらフフンッと鼻で笑った

サーティヤ ジュニア王は、シーノとロックスを見やつた。
「うるさいであつたな。褒美を取らすぞ」

そう言つと、後ろに控えていた家来が一つの革袋をそれぞれ
に一つずつ渡した。

ジャリンという重い響きを鳴らし、革袋は一人の手にずつし
りと乗つた。

きっとと大量の金貨が入っているのだろう。

本来なら喜ぶべきその報酬に、シーノは何故か心が重く感じ
た。

隣を見ると、ロックスもまた苦い表情をしていた。
二人は重々しく一礼すると、その場を離れた。

部屋に戻つてからも、シーノは心晴れず外を眺めていた。その様子を、ルームメイトであるロックスが心配そうに見ていた。

「あいつ、ちゃんと逃げられるかな？」
呟くように言うシーノ。

視線の先には、連日のように入り浸つていた森が広がつていて。

兵士達が寝泊りしている部屋は城の一角にあり、城下町も一望出来る。

いち兵士には勿体無いくらいの絶景だ。

部屋は一、四人部屋になつており、簡易な棚やテーブル、椅子などの必要なもの以外はほとんど置いていない。

窓には木窓がはめ込まれてあり、隙間風がいつも部屋を回つている。あまり部屋にこもることが無い兵士たちには、寝られるだけで充分なのだ。

二人の間にあるテーブルには、さつきの革袋が一つ、ドン…と載つている。

それをチラツと見て、ロックスはハツと息をついた。

「じゃ、引き渡すことなかつたんじゃねーの？」

シーノはロックスを見た。

「んだよ。これしか方法が無いつて思つたんだよ」

革袋から視線を逸らせるようにまた外を見た。するとすぐ、思い立つたように座つていた窓辺から下り、部屋を出て行こうとした。

「ど、行くんだよ？」

尋ねるロックスに、

「ちょっと」

それだけ言つと、手ぶらのまま外へ出た。

「んだよ……」

取り残されたロックスは、ドサッとベッドに寝転がり、テーブルの革袋を見て、やうやく頭をかきむしめた。

シーノは城を出ると町へ入つた。

夕刻に差し掛かり、家々から美味しそうな匂いがする。

そういえばまだ夕飯を食べていなかつたな……

だが今はそんな気分でもない。

人通りのまばらな中を歩き、一軒の前に立つと、扉をノックした。しばらくして、五十代位の男性が出てきた。

突然の兵士の訪問に驚く男性に、シーノは尋ねた。

「コダマの事を教えて欲しいんですが、お婆さんはいますか？」

「コダマ？」

いぶかしげる男性の後ろから、小さな人影が現れた。

「コダマを捕らえてはならん」

森に入る初日に、必死で訴えていた老婆だ。

それから何度も森へと行き来する兵士に訴えているのを、シーノは見ていて気になつっていたのだ。

「コダマを捕らえると、一体どうなるんですか？」

家の中に通されたシーノは、老婆の話を聞き始めた。

老婆はしつかりとした口調で、我が子に語る昔話のよつと語り始めた。

森にはコダマが居る。

世界中にどれだけ居るのか、それは誰も知らない。

そもそも、コダマというのはどういうもののなのかも分からぬ。噂でしかなかつたからだ。

ただ、森の中の平穏が乱れた時、コダマは姿を現すという。例えば……

人の故意の性で山火事が起きた時、雨雲を呼び一瞬で火を消したという話もある。

そしてその犯人を含め、村が丸」と森に飲み込まれたとか、恐ろしい噂も広まった時期もあった。

逆に、木々を大切にし動物達と共に存をすることに協力的であれば、助けるように恵みを与えてくれる。

見えないけれども、大きな影響力を持つているコダマ。触らぬ神に祟りなし、とはよく言つたものだ。

『歌は癒し、泣けば水晶、死して泉』

それが、コダマの姿なのだといつ。

話を聞き終わると、シーノは木でできた机の上にチャリンと何枚かの金貨を置き、驚いている家人に

「ありがと」

と礼を言つと外に出た。

その後を、おぼつかない足取りで老婆が追つた。

「兵士さんの名は……？」

「シーノと言います」

「シーノ様、どうか……どうか、コダマを守つてやつてください。
どうか……」

拝むように何度も頭を下げる老婆の肩に手を置くと、シーノは何も言えずにその場を離れた。

外はすっかり夜である。

心地よい風がシーノを撫でる。

老婆の話を思い起こせば、サージヤ ジュニア王は確かに、「声を聴きたい」と言つていた。それ以上の事は何も言つていらない。

という事は、その後の『泣けば水晶、死して泉』というくだりは知らないのか。

それに老婆の話では、『雨雲を呼び火を消した』とか『村を飲み込んだ』とか、シーノの知つてゐるコトには到底出来そうも無い噂話ばかりだ。

『どこまで信じていいのか……』

だが、『コダマの事を案じているのは確かにようだ。

老婆の小さな瞳には、必死な思いがこもつていた。

そうでなければ、何度も屈強な兵士の前に立ちはだかりはしないだろう。

翌日の朝早く、浅い眠りから覚めたシーノは何か気配を感じて窓を開けた。

森が騒いでいる気がした。

風が強いわけでもなく、木の枝がざわついているのだ。

シーノに便乗するよつて田覚めたロツクスは、特に気にする様子もなく

「気の性だろ」

と言つたが、シーノは何故か胸騒ぎがした。

やがてサージヤ ジュニア王が広間にてコテイと話すところのを

聞いたシーノは、飛ぶように広間へと向かつた。

妖精は籠の中

広間に入ったシーノは愕然とした。

高い天井の中央に、鉄で出来た大きな鳥かごが吊るされており、その中にコディイが押し込まれていたのだ。

「まるでかごの中の鳥だな」

「人間なのか？」

興味津々でみつめる兵士達の間を縫つて、シーノたちは鳥かごに近づいた。とはいえ、天井近くまで吊るされているので、中の様子がよく見えない。

冷え冷えとした感触の鉄かごは、時折かすかに揺れている。

「コティ……」

シーノが見つめる先には、震えて小さくなっているコティがかろうじて見える。

「寒いのか？」

知らない間に、後ろにはロックスがついていた。彼もシーノの後を追つてきたのだろう。シーノと共に見上げている。

「いや、寒いんじゃない。怯えてるんだ」

コティは目を閉じて、ひたすら震えている。

小さな体が余計に小さく見える。

「逃げるどころじゃないみたいだな」

つぶやくロックス。

シーノの胸がキリキリと痛んだ。

広間の大扉がギギギと開き、家来に付き添われたサー・ジヤジュニア王が杖について入ってきた。

「下ろせ」

ヒ言つ声に、ゴーティの入れられている鉄かごがズルズルと下りてきた。

サーチヤ ジュニア王の皿の高さをほどほど下ろされると、ゴーティは少しだけ目を開けた。

「眠れたか？ おや、食事も取つていないじやないか」

見ると、ゴーティの足元には皿に載せられたパンがある。触りもしなかつたのだろうか。少しも減つていないようだ。

「ひでえ……」

シーノは悔しそうにつぶやいた。

ジュニアは鉄力ゴに近づき、楽しそうに言った。

「ちゃんと食べんと、歌も歌えまい」

言いながら杖をかごの隙間に差し込むと、皿をグツと押しあつた。

反動でパンが零れ落ち、ゴーティの足元へと転がつた。

ゴーティは目をそむけ、そしてギュウッと閉じた。

それを冷たい目で睨んでいたサーチヤ ジュニア王。

「まあ、食いたくなければ食わんでもよい。 まあ、歌えー。」

サーチヤ ジュニア王は杖で床をゴンと突いた。

静かに見守るたくさんの目の中、時が止まつたように空気が凍りつく。

数刻待てど、ゴーティは口を開く素振りもない。

相変わらず震えながら体を丸めている。

「歌わんかっ！ こりつー！」

早々にキレたサーチヤ ジュニア王は、かごを杖で叩いた。

ガンガンッ！

！

ゴーティはなおさら体を丸めて硬くなるばかり。

その様子を冷ややかに見下し、フンッと鼻で笑つた。

「歌つまでここから出さんからな！」

そう言つと、サーディヤ ジュニア王は家来に持つてこさせた椅子にドッカと座り、かごを見やつた。

いつまでも待つてやるぞ、という余裕の田をぎらつかせて。どひせこの王はやることもなし、一日ヒマをしてこるのでから。ローティはその様子にまた怯えている。

「いのやろ……」「

あまりの仕打ちに、シーノは思わず王に駆け寄りついた。その肩を、ロックスがグイッと引き止めた。

「！ なんつにすんだ？」

「行つてどうするんだ？ 落ち着け！」

諭すように耳元で言うロックス。

確かに今出て行つたところで何も出来ない。

かごには大きな南京錠がついている。たやすく出してくれそうもない。

「くそつ……」

シーノは悔しげに唇をかみしめ、たまらず広間を後にした。

その後を、ロックスも追いかけた。

「後悔してるんだろ？」

部屋に戻ると、ロックスは言った。

「……」

それには答えず、シーノは爪を噛みながら窓辺に座つて外を見ていた。

ロックスは、それ以上何も言わなかつた。

テーブルの上には、手付かずの革袋二つが所在なさげに埃をかぶりつつある。

シーノの腕が、その革袋を払いのけた。

ジャリジャリンッ！

重く硬い音が部屋に響いた。

それを、ロックスも静かに見ていた。

救出！ ハディ、生れりー！

幸運なことに、その夜の広間の警護はロックスの役目だった。もう一人の同僚は今、ロックスの足元に眠っている。

その手には飲みかけのコップが指に引っかかっている。

「よく効くな、この睡眠薬」

そう呟くロックスに近づく影があった。

シーノだ。

「早めにな」

余裕気に呟つロックスの言葉にうなづくと、スルリと広間へと入った。

灯りが点いているわけでもなかつたが、窓から差し込む月明かりのおかげで充分な視界は開けている。

シーノは見上げた。

天井近くまで吊り上げられている鉄の鳥かごに向かって、トンッとジャンプすると、フワーンッと鉄かごにつかまつた。

かごが大きく揺れ、ジャリジャリンッと南京錠が硬い音を立てた。

驚いているハディに声をかけた。

「ハディ！ 大丈夫か？」

あ……シーノ……

その姿を間近で見て、シーノは息を飲んだ。

見るからに昨日よりも衰弱している姿は、月光の中でも容易にわかる。

ハディを気遣いながら、シーノは慣れた指先で細い棒を使って南京錠を開けた。

ガチャーン、ゴン！

もはや氣づかれても構わない程の音をさせて南京錠を下に落とすと、ガチャーンッと扉を開いた。

「や、ゴーティー！」

シーノが差し出した手に、弱々しいゴーティの手が近づいた。
次の瞬間――

シーノとゴーティのカラダは宙を飛んでいた。

広間の窓から月光に導かれるように外へ飛び出したシーノは、ゴーティを背負って森へと走った。

走りながら、シーノはゴーティに聞いた。

「なんで逃げないんだよ？ チャンスはあつたる？」

苦手なんだ……

弱い声でゴーティは答えた。

「え？ 何が苦手だつて？」

鉄とかいう、人間が作ったもの……は、簡単にモリを傷つける……

……

「んな大事なこと、早く言えって！」

悪いのは自分だと分かつてはいたが、憎まれ口を叩くのがいつも一人の会話。自然とそんな言葉が出てしまった。だが、コディからはいつもの突っ返しがない。

ザンツと森の中に入ると、コディはシーノの背で言った。

「力力のとこへ……

「力力？ つてどこにいるんだ？」

「案内しろよ、連れてつてやるから！」

シーノは全速力で木の間を駆け抜けた。

残してきたロツクスはなんとかやっているだろう。心配ない。信用できる相棒だ。今はコディの事だけを考えることにしよう。

走るうち、背中のコディの気配が薄れていく感触に襲われ、シーノは必死に励まし続けた。

「！」

突然、シーノの足が止まつた。

目の前に巨木が現れたからだ。

以前見たババの木とはまた違つた太くたくましい幹が、月光に照らされて妖艶に輝きを放つている。

驚いて声にもならないシーノの背で、コディは顔を上げた。

「力力……

「え、じゃあ、これが、力力……の木……？」

不思議なことに、ババの木から感じられた威圧感がまったくない。

優しい空気が辺りを漂っている。

シーノは、「ゴディの指差した方を見た。

力力の木の根っこに、小さなくぼみが見えた。

吸い寄せられるように、ゴディをそこへ座らせた。

衰弱してクタンとなつてゐるカラダが、すっぽりとそこへ包まれた。

何故かシーノには、その根っこが柔らかくゴディの体を受け入れたように見えた。

ゴディは弱々しく顔を上げ、シーノに言つた。

……ありがとう……

シーノはゴディの前に膝まづくと、その顔を覗きこんだ。

「ゴディ……すまない……」

かすかに微笑みを返したように見えた。 その肢体はもう力なく力力の木の根に全てを預けているようだ。 柔らかな前髪が風にそよいでいる。

「……」

シーノはそつと立ち上がり、力力の木を見上げた。

「力力の木……すまなかつた。 こうなつたのは俺の性だ。 反省してゐ。 もう、ゴディ……いや、ゴダマをつらい目に合わせないと約束する。」

そして眠るようこゝなだれでいるゴディを見た。

「守ると、約束する」

再び見上げた力力の木は何も言わず、ただ月光に照らされ、シーノを静かに見下ろしている。

シーノは少し唇を噛むと、その場を離れた。

残していくゴディは心配だつたが、きっと森に帰つた方が幸せだと思つた。

振り返ることなく、シーノは城へ向かった。

もつコディに会えないとしても仕方ない。

そして、森から何か罰が下るのなら、受け入れなくてはなら

ないだろ？

どこを走っていたのか……シーノは城へと無事に着いていた。

すでに明け方。西の空が白んでいた。

城内は驚くほど静かだ。

部屋にはロックスも戻ってきていた。

「ロックス、大丈夫だつたか？」

部屋に入るなり心配するシーノに、ロックスは起きたての顔で答えた。

「んああ、おかえりシーノ。ジユニアが騒ぎ立ててるんで、『広間の中にも警護を付けないから逃げられたんです』って言つてやつたら、何か納得してよ。黙つた」「黙つたって……」

シーノは拍子抜けした。そんな終わり方ありかよ？

「『あんな歌えないカナリヤなど、もういらん』だとよ」

「それはそれでムカつくな！」

ロックスはベッドに座りなおすと、今度はシーノが聞かれる番だった。

シーノは力力の木にコディを預けてきたことも全て伝えた。

そして、これから森から何かの罰が下ることがあっても、受け入れるつもりだと。

一通り聞くと、ロックスもホッとしたように微笑んだ。

「ま、何が来ても、受け入れるしかないだろ？」

ロックスもまた、罪悪感を感じているようだ。

それから再び、平和な日々が戻った。

兵士達はいつ駆り出されてもいいように訓練に明け暮れ、相変わらず民も商いに活気付いていた。

サージヤ ジュニア王もぐうたらなのは相変わらずで、政治にも無関心。

すべて元通りの生活だ。

……いや、一部そうでない者もあつたか。

シーノとロックスの心境はいまだ落ち着いたものではなかつた。

特にシーノの中には、力力の木に抱かれたゴディの最後の姿が目に焼き付いて離れない。

訓練にも集中できず、空き時間には部屋にこもってずっと窓の外を見つめていた。そこから見える森は、いつもと同じように鬱蒼と、そして静かにそこに在つた。

数日経つて、いつものように窓辺に座つていたシーノはふと体を浮かした。

それに気付いたロックスが

「どうした?」

と尋ねると、彼は森を見つめたまま言った。

「呼んでる……」

そして、誘われるよつて窓辺から飛び降りたのだ。

「シーノ！」

驚いて窓辺に駆け寄り下を見ると、身軽に屋根を伝い、森へと駆けていく。

「あいつ！ 森で何が起こるか分からないうつてのにー。」

急いで自分も部屋を飛び出した。

シーノは自分の信じる場所へと急いでいた。 ただそこに行けば何かが分かる。 例え何があつたとしても、ゴトディに会えるならそれで良い！ シーノはひたすら田指していた。

力力の木を！

「ゴディ」との再会

力力の木への道順など、もう覚えていない。

あの時はひたすら自分の背中でぐつたりしている「ゴディ」を気に掛けていたので、道を覚えるどころではなかつたのだ。

それでは何故、シーノは城へと戻ることが出来たのか……それはシーノ本人にもわからなかつた。 気が付いたら城の前に居たからだ。 だいたいゴディの存在自体、不可思議なものだ。 何らかの力が働いたのか……全く分からぬ。

だからシーノは、ただ力力の木を思つて走つた。
覚えている限りの力力の木の姿とゴディを思つて、全速力で走つた。

その時だつた。ザンツと頭上の枝から何かが落ちてきた。

「！」

身構えたシーノの前に何かの気配。

「ゴディ！」

目の前には、あの時出会つたばかりの頃のいたずらっ子のような笑顔を見せたゴディが立つっていた。

「ゴディ……元気になつたのか？」

するとゴディはクルクルと回つてニーッゴリとした。

『元気だー』

そうして、ガバッとシーノに襲い掛かつてきただ……と思つた。

「一」

無抵抗で目だけをきつと閉じたシーノは、しばらく経つても何も起こらないのに怪訝に思つて、恐る恐る目を開けた。シーノの両肩に手を掛けたゴティは、大きな目をしばたいてシーノを見つめている。

『どうした?』

相変わらず、頭に直接入つてくる声だ。

シーノは近づきのゴティに心懸いながら言った。

「な……殴つたり、するんじゃないのか?」

それを聞いたゴティは、首を傾げた。

『なんでだ?』

「なんでつて……」

シーノはもつと困惑っていた。

「俺はお前にひどいことをしたんだぞ?」

自分で言うのも変だが…… そんなんだから仕方ない。

ゴティはピヨンッと離れた。

『そうだけど、助けてくれた。だから許せって、カカが言った』

「カカの木が?」

『そうだよ。だからゴティはシーノとまた友達だ』

ゴティは一点の曇りもない笑顔を見せた。

だがシーノはまだ確かめなくてはならなかつた。

「ゴティは、どう思つてるんだ?」

また首を傾げた。

「力力の木がそつ言つたかもしれないけど、『ティ自身は、どう思つてる？ 痛くて怖い思いをしたんだぞ』

だから……自分で言つのもおかしい話だ。まるで罰を欲しているみたいに……

でも、力力の木の言葉は普通に嬉しい。本当に素直に受け取つていいのか……そんな心境を察したように、『ティは優しく笑つた。

『力力の言葉は『ティの言葉。それに、『ティはシーノが大好きだ』』

その瞬間、シーノは『ティを抱き締めていた。
懺悔の気持ちが溢れた。

「『めん、『ティ』」

なんでこんなに純情なのか……ていうか、自然には怒りや復讐といった負の心はないのか？ そついえば以前言つてた。

『『見守るだけ。キズつけることは出来ないんだ』』

それはきっと、尊いことなんだわ。そして、悲しいこと……

変わらぬ瞳で見上げる『ティが自分にはとても眩しくて、そして、とても大切に思える。シーノの口から自然に言葉が流れだした。

「これからは、俺がゴディを守るよ」
「ゴディは何も言わずに二ヶコリと微笑んだ。

その時、ガサガサッと草を分け入る音がした。

「！」

「ゴディを守るように身構えたシーノの前に、汗だくのロックスが現れた。

「ロックス？」

驚いているシーノを見ると目を見張り、そして嬉しそうに言った。

「シーノ！ 良かった、大丈夫か！」

すぐに、自分の身を案じて追つてきたのだと気付くと、シーノはフツと笑った。

「大丈夫だよ、ロックス」

シーノの後ろからゴディが顔を出した。 ロックスは驚いた。

「シーノ！ 大丈夫なのか？」

「大丈夫だつて、言つたろ？ ゴディは許してくれたんだ」

なだめるように言うシーノの肩にゴディを見るロックス。

そしてシーノの顔を見てやつと納得したように息を吐いた。

「そうか、良かった」

やつと三人の間に笑顔が戻った。

それからシーノとロックスの2人はたびたび森へと出向くようになつた。

勿論、「ゴディに会うためだ。

もうサーボジヤ・ジュニア王も「ゴディを思い出すことは無くなつた
よつで、また以前の静かな森と国の平和が戻つた。

シーノはゴダマの事を教えてくれた町の老婆の所へ行つて、ゴディ
イが森に戻つたことを伝えた。

城のなかで何が起こつているか分からぬ老婆はただずつとゴダ
マの身を案じていたといつ。無事に森に帰つたと聞き、老婆はと
ても安心したように、涙を流してシーノに礼を言った。

だが、そもそも城へと連れて行つた張本人でもあるわけだし、か
なり複雑な心境のシーノだつた。

カリンとの出会い

ある日、二人はいつものように森へと遊びに行き、ゴディとたわいもない話をしていると、ガサガサッと枝が揺れた。明らかに風ではない。獸かと思い見上げると、突然人影が飛び降りてきた。

「！」

身構える二人。ゴディも思わずシーノの服の裾を掴んだ。

「その子がコダマ？」

鈴のような可愛らしい声だ。

降りてきたその人影は、まだ若い少女だった。茶色い髪の毛は肩下まで伸びたストレート。クリツとした瞳がキラキラとしている。いかにもおもちゃを見つけた子供のようだ。

「誰だ？」

威嚇するシーノを押し退けるように、少女はゴディを覗こうとする。シーノは少女相手に手も出せず、ひたすらゴディをかくまおうとする。ついにロックスが女の肩をむんずと掴んだ。

「いい加減にしろよ！」

彼もたまらなかつたのだろう。だが少女は驚くことも怖がることもなく、おとなしく少し離れた。そして、あつという表情をすると、改めて襟を正した。

「自己紹介がまだだつたわね。あたしはカリン・スタクス。あなたがシーノさんね。お婆ちゃんが、あの人はいい人だつて。」

「お婆ちゃんが……じゃあ君は……」

シーノとロックスは顔を見合させた。

なんと田の前の少女は、ゴティの事を教えてくれた老婆の孫だったのだ。

隣の国へ嫁いだ娘の子供で、今ちょうど帰省しているらしい。そして、シーノの話を聞き、森に行けばどちらかに会えると思ったらしい。

「良かつた。両方に会えて。」

やつと納得したシーノはカリント尋ねた。

「それで、何か用でもあつたのか？」

シーノの言葉を無視するように、カリントゴティに近づくと腰をかがめて目線を合わせた。そして満面の笑顔で嬉しそうに言った。

「可愛いー！」

怯えるゴティの後ろで、ロックスもあきれてその様子を見下ろしている。ロックスからしたら、まるで除け者扱いされている事に面白いわけが無い。

カリントはまるでそんな事は気づかないかのようにシーノを見た。「用なんてないわ。ただ会つてみたかっただけ。森の精つてどんなものなのか、確かめてみたかったの」

珍しそうに見つめるカリントの視線に耐えられなくなつたように、ゴティはロックスの後ろに隠れた。少し淋しそうな顔をしたカリントにシーノが尋ねた。

「しかし、普通の人にしては身体能力が高いな」
まだ信じ切れていないところがある。

カリントはニゴツとして、また頭上の枝へと飛び乗つた。周りの

周りの

葉がハラハラと落ちた。枝に座り三人を見下ろすと

「あたしが生まれた町はね、兵士を育てるのが盛んなの。あたしも見習い。こんな軽いものよ」

と言いつと、またクルクルと前転しながら舞い降りた。

「へえ、たいしたもんだ」

ロックスの言葉に、カリンは自慢気に胸を張つてみせた。それを見たシーノは、あきれたようの一息つくと、ゴディの方をむいた。

「じゃ、またな」

《え、もう帰るのか?》

淋しそうに言うゴディをなだめるようにロックスが声をかける。

「もうすぐ日が暮れるからな。また来るから」

いつものパターンだ。ゴディは一人を見上げた。

《うん。また遊び》

ニッコリと微笑むゴディに軽く手を振つて、シーノたちは家路に着いた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよっ!」

カリンが慌ててシーノを追つた。ゴディはすでに消えている。

「今無視したでしょ? ねえ、ゴダマの声つて、頭のなかに直接入つてくるのね。あたしビックリしちゃつた。」

気にしないように歩く二人を縫うように歩き、カリンはしゃべり続けている。ロックスがたまらず言つた。

「ああ~もう、うるさいよ! いいか? ゴディの事は他言厳禁! わかつたなつ?」

突つ掛かるロックスを面白そうに見上げ、カリンはさらりと言つた。

「あの子ゴーティって言つんだ？ 可愛い名前じゃない。 ね、あたしも仲間に入れてよ？」

「…」

絶句して立ち止まる一人の前で、カリンは満面の笑顔で次の言葉を待つてゐる。

シーノははあつとため息をつき、腰に手をあてるとあきれたように言つた。

「俺たちは仲間なんかじゃない。 ただの友達だ。 それに君は、俺たちのよつたな兵士じゃないし、何かあつても責任は持てない」

「いいわよ」

軽く言つカリン。 ゴーダマがいつ狙われてもいいよつた危ない立場だといつた事がわかつていいらしい。 そもそもシーノたちがたびたびゴーティに会つのも、その身が心配だからだ。

「君は事の大きさを分かつていいな」

「ババの木、カカの木」

カリンは歌つようになつた。 そのことは、シーノ達しか知らないはずだ。

「何故それを？」

カリンは微笑んだ。

「あたしを誰だと思つてるの？ ゴーダマと共に過ぐした人の孫よ」

「一緒に過ぐしただつて？」

シーノ達は驚いた。 その顔を見て、カリンはクスクスつと笑つた。

「やっぱり全部を聞いたわけじゃないのね。 あたしのお婆ちゃん

は、昔まだ若かつた頃に迷った森のなかで「ダマ」と会って、しばらく一緒に過ごしたんだって。だから、この森のことはよく知ってる。どこにババの木やカカの木があるか。「ダマの伝説の事も

シーノたちは言葉を失っていた。

目の前の少女は「ティの事をよく知っているようだ。シーノがまだ知らないことも。あの老婆が自分の孫に嘘をつくようには見えないし。カリンは微笑んだ。

「あたし、結構使えるわよ」

シーノは少し考えると言つた。

「君の言つていることは嘘じゃないと思つけど、まだ信用することはできない。変なことをするようなら、ただではおかしいから、そのつもりで」

カリンは呟くように言つた。

「よつぽど「ティの事が大好きなのね」

その言葉にシーノは

「大切な存在なんだ」

と返し、きびすを返すと城へと向かつた。その途中、ロックスが耳打ちした。

「いいのか、放つておいても?」

シーノは後頭部で両手を組み軽い口調で答えた。

「所詮、素人の女だしな。いいんじゃない?」

そう重く考える事もないか、とロックスも納得したようにツと笑つた。

森の中の不審人物

翌日は雨が降った。

「このところまとった雨がなかつたので、森にもきっと恵みとなつただろう。だがこう大降りでは外に出ることも制限される。

ザーザーと降る雨粒を眺めながら、つまらなさうに窓辺に座るシーノ。

兵士とは、使われない限りは暇なのだ。訓練や武器の整備は毎日しなくていい（といつが個人に任せている）、城の警護は順番性だ。

部屋の中で静かな時間を過ごすシーノとロックス。遠くまで雨霧で霞む森の中で、不穏な動きがあるのをまだ知らずにいた。

数日経つて、やつと青空が顔を出した。爽やかな風が湿つた空気を流し、あちこちで洗濯物がはためいている。シーノはやつとコディに会えるとあつて浮き足立つていい。軽い服装に着替えると、同じように準備を済ませたロックスと共に部屋を出よつとした。その時、部屋の中に一陣の風が巻いた。

「？」

振り向くとそこに、コディの姿があつた。

「コディ！ 来ちゃいけないって言つたはずだぞ？」

驚くシーノに、コディはフワントと抱きついた。体が震えてくる。

「どうしたんだ？ 何があつたのか？」

コディの様子がいつもと違うのに気付いた途端に不安が胸をよぎつた。じゃなければ、わざわざ危険を犯してまでシーノのもとに来るわけがない。コディは少し震えた声でシーノに言つた。

『森の中に、変な奴らが入ったんだ』

「へんなやつら？」

「旅人や商人が雨宿りでもしてたんじゃないのか？」

ロックスの言葉にシーノもそう思つたが、そんなことならゴディもわかるだろ？。ゴディはブンブンと首を横に振つて訴えた。

『違うんだ。だつて奴らの周り、空気がよどんでる！ 絶対悪い奴らだ！』

どうやらゴディは、人の雰囲気で何かを感じるようだ。

『奴ら、城がどうのつて言つてた！』

その言葉に、シーノとロックスは緊張が走つた。

「そいつら、どんなやつらかもう少し詳しく教えてくれ」

シーノが言つと、ロックスが慌てて言つた。

「ちょ、ちょっと待てよ。俺たちだけでなんとかしようとする気じゃないだろうな？」

すでにシーノは窓辺に足をかけていた。ロックスの方を振り向くと、

「ちょっと偵察に行つてくる！」

と片手を挙げ、そしてフワッと飛び降りて行つた。

「おい、シーノ！」

ロックスの呼び掛けにも答えず、シーノはタタッと走り去つた。その首にはゴディが腕を絡ませている。

「つたく、あいつは！ 時々突つ走るからなあ！」

ロックスは頭をガシガシかきむしりながら、困り果てたようにシーノの後ろ姿を見送つた。

シーノは走りながら首にしがみついているゴディに尋ねた。

「ゴディ、そいつらはどこに居るんだ?」

『ババの木の近くに集まってる』

指差す方へ急ぎ、やがてババの木の近くになると、気配を消して枝に飛び乗ると周りをうかがつた。少し広がった場所に、何者が寝泊りしているらしいテントを見つけた。人の姿はまだ確認できない。

「あそこか……」

シーノはゴディを下ろすとささやいた。

「お前は隠れてる」

「ゴディは心配そうにシーノを見上げた。裾をつかむ手を優しく握ると、そつと離して笑顔で言った。

「大丈夫だ。ちょっと見てくるだけだから」

そしてゴディの頭を一、三度グリグリッとなでると、きびすを返した。

木陰に隠れて様子をうかがい見ると、こじんまりとしてはいるが陣営のようだ。あきらかに旅人や商人の作る簡易的なものではなく、長期利用出来そうなしつかりとしたテントが二つ。外には焚き火の跡や食事の跡がある。ただ静かにたたずんでいる。物音ひとつしない。

『誰もいないのか?』

シーノは周りを気にしながら近づいてみることにした。

テントの壁に耳を付けたが、中には誰もいないようだ。用心しながらテントの中を覗いた。中には毛布と小さな机、そして数冊の書籍。

『森の深部』

『未確認生物学』

……なんだか難しそうな題名が並んでいる。

積まれている本の間に挟まれているメモの字を見て、シーノの全

身に鳥肌が立つた。

『「コダマ?』

シーノは慌てて外に出た。

その時、バンッという破裂音と共に彼の足元の土が跳ねた。

「！」

周りを見ると、五、六人の男女がシーノを囲んでいる。

「しまった！」

その中の赤髪の女が冷たく銃口を向けている。

「セツナさん、まず」」挨拶してさしあげなくては。 彼、ビックリしているじやありませんか」

女の後ろから、眼鏡を指先で上げながら細身の男が現れた。 動けずにはいるシーノに向かって、余裕を見せながら悠然と立っている。

「はじめまして、泥棒さん。 人様の住居に忍び込むなんて、あまり行儀の良い事ではありませんねえ。」

ジリジとまわりの男たちが身構えている。 合図一つで襲い掛かれる態勢だ。

「……」

シーノは機会をうかがつた。 必ず隙があるはずだ。 眼鏡男がゆつたりと話した。

「私はクリス・ゴードンと申します。 学者をしています。 この辺りは縁が豊かで、研究するにはとても最適なんです。 ところが、町で食料などを調達している間に泥棒に入られた……これは由々しき事態です」

はあ、とため息をつくクリス。

学者がわざわざこんな森の中にテントなんて張るか？ 周りを囲む男たちも、戦いに慣れた感じがする。 中には舌なめずりをして、早く戦いたそうな顔をしている。 セツナと呼ばれた赤髪の女も、ストレートな長髪で半分以上顔が隠れているが、表情なく冷たい感じがする。 怪しいところばかりだ。 クリスはニヤッと口を歪めた。

「中で何をしていたんですか？」

「……！」

黙つているシーノにクリスは一息つき、呆れたように言った。
「何をしていたにしろ、あなたはあまりよくない事を知つてしまつた顔をしていますね。 もしや、私たちが探しているモノを知つているのでは？」

シーノは黙秘している。

「交渉次第では、この荒々しい人たちを押さえて、あなたを解放してあげますよ」

「お前たちの目的はなんだ？」

「ふうん。 じゃあ教えて差し上げましょう。『ロダマ』を探してきます」

シーノは『やつぱり』と心の中でうなづくと、クリスに言った。
「この森にそんなものはいない。 これ以上探したところでは、虫に刺されるか獸に襲われるくらいだ。」

「ははあん……ですが、この国の王が捕らえたとあちこちの国では噂になつていているのですがねえ……」

『なんだよあいつ！ 言い触らしやがつて！』

シーノは心の中で主に悪態をついた。

「噂話だ！ ここには何もない！」

「やつぱり何かを知つていてるようですね。 本当は王に会つて問い合わせたそうと思ったのですが、その心配もなさそうですね」
囲む輪がジリッと狭くなつた。

事件発生！

『くつ……』これまでか

シーノは覚悟を決めた。

その時一陣の突風が吹き、砂や葉をまつた風がシーノ以外の目をくらました。

「なんだ！」

慌てて崩れた陣を縫つようご、シーノは駆け抜けた。

「逃げるぞ！ 追え！」

クリスの声にセツナが銃を撃つた。パンパンッという破裂音の中、男たちがシーノに迫つたが、素早さでは群を抜いている。あつという間に姿を消したシーノ。残された男たちは悔しがつた。

クリスはクイッと眼鏡を上げると

「まあ、仕方ありませんね。城へ参りましょう」と一息ついた。

木の間から、ゴディイが顔を出した。

『シーノ！』

「ありがとうな、ゴディイ。助かつた！」

追つ手が来ないのを確かめて、やつとシーノは立ち止まって一息ついたと同時に、その場に膝をついた。

『シーノ？』

腕から赤い血がしたたり落ちてている。

『！ ケガしたのか？』

驚くゴディイの前で、シーノは息を荒げている。

『やられた……』

押さえている左の肩口が血で染まつていいく。 「ゴディが悲痛な

声を上げた。

『シーノ！ シーノ！ しつかりして！』

木陰にもたれるように倒れると、うめき声をあげた。

「……銃なんて卑怯だよな」

皮肉つて言つてみたが、その表情は苦痛に満ちている。 ゴディはただ何も出来ずにおろおろしている。

「ゴディ、ロックスを呼んできてくれないか？ ああでも、無理はするなよ。まだあいつらがうろついてるかもしれないからな。」

ゴディは次第にその瞳に涙をためて、そしてそれはポロポロとこぼれ落ちた。 シーノは足元に転がるそれを見て老婆の話を思い出した。

『泣けば水晶…』

「この涙が本物なら、クリスたちだけじゃなく、サーボン、ジュー・ア王だつてどうするか分からない……」

その涙をぬぐつてやりたいが、肩口の鈍痛が体中に広がり、意識も薄れきっている。どうにかゴディだけは守らないと……

「ゴディ、逃げ……ろ……」

意識が遠くなり、泣きじゃくるゴディの姿が次第に曇つていいくシーノ。

『もうダメかも……』

と思つた瞬間、その口に布が押さえ付けられ、そのまま眠るようになきを失つた。

ぐつたりしたシーノの前に、カリンが膝をついてその顔を覗きこんでいる。その手には小さく畳まれた布切れ。パンツとはたく

と、一、「三枚の草がこぼれおちた。

「近くに麻酔草があつてよかつたわ。 こんな傷を放つておいたら、痛みでおかしくなるもの。」

手を差し伸べようとするカリンの裾をゴディイが引っ張った。

『な、何をするんだっ？』

必死の形相で言うゴディイに、カリンはこの間の時とは違つ真剣な顔で言った。

「ゴディイ。 シーノはケガをしてる。 私はそれを診てあげようとしてるの。 シーノを助けたかったら、その手を離して。」

ゴディイは口を真一門につむぐと、静かに裾を引っ張る手を離した。カリンは優しく微笑んだ。

「ゴディイはいい子ね」

カリンは慣れた手さばきでシーノを寝かせると、肩の辺りの服を破つた。 傷口があらわになると、

『あつ！』

と驚くゴディイを気にもせず、手早く血液を拭き取つた。

「ゴディイ、 血を見たくなかつたらあつち向いて」

カリンの言葉に、ゴディイは

『はいっ！』

と後ろを向いた。 だが離れることはしなかつた。 その様子を

見届けると、カリンは再び治療に取り掛かつた。

「弾が残つてゐる……」

素早く触診すると、躊躇なく懷から取り出したナイフで傷口を少し裂いた。 ピュッと血液が散つたがお構い無く、今度は懷からピンセットを取り出すと

「大丈夫、すぐ終わるわ」

と、気を失つているシーノに言つてゐるのか、自分に言つてゐる

のかわからぬ様子で咳き、丁寧に差し込んだ。

音もなく挿入され、すぐに出でてきたその先端には、小さな鉄の塊が挟まれていた。それを見ると、カリンはやつと一息ついた。

「よかつた……」

そして休む暇もなく、真っ赤に染まつた傷口を清潔にし、布でギュッと縛つた。一通り終えたが、シーノはまだ眠っている。

「しばらく寝ててくれるとい嬉しいんだけど……」

カリンはすつと後ろを向いていいるゴディに言った。

「もう大丈夫よ。」

ゴディはやつと笑顔を見せて振り向くと、血がにじみ痛々しい手当姿を見て、また心配そうな顔をした。そして思い出したように声をあげた。

『そうだ！ ロックスを呼んできてって言われたんだ！』

「ちょ、ちょっと待ちなさいよー。人に姿を見られたらどうするのよー。」

心配するカリンに

『大丈夫だ！』

とだけ言つと、すつと姿を消した。城へ向かつたのだ。シーノと共に残されたカリンはフウッとため息をつくと咳いた。

「つんとに……まっすぐな子ね」

俺は裏切り者でいい！

城ではサーダジヤ・ジユニア王が広間にいた。その御前には、クリスがセツナだけを連れて来ている。面白い情報を持つてきたと言われたら、疑いもせずに城内へ招いてしまつ。サーダジヤ・ジユニア王の悪いくせだ。側近が危険だと警告しても、聞く耳は持ち合せていない。サーダジヤ・ジユニア王は、今度はどんな暇潰しが出来るのかとワクワクしている。そんな表情が、パンパンに膨れ上がつていてる顔からにじみ出でている。

クリスはうやうやしく一礼した。

「この度は、このような学者崩れを招き入れていただき、大変恐縮しております。本日は、是非サーダジヤ王の耳に入れておきたい情報がありまして、遠い国から参りました」

「クリスと申したな。あまり焦らすな。早く用件だけを言え」苛々がつのつていてるサーダジヤ・ジユニア王の顔を見て、クリスの口元がニヤッと吊りあがつた。

「「ドラマの事でござります」

するとサーダジヤ・ジユニア王は一気に興味を失つた顔をした。「なんじゃ。『ドラマならもう捕らえたわ。じゃが、歌いもせずつまらんかった。すぐに逃げたしな』

つまらなさそうに杖をもてあそびながらそう言つと、「それだけなら、帰るがよい」と、杖で扉を指し示した。

クリスはきょとんとした顔をした。

「逃がしてしまわれた？ それはもつたのうございました」その言葉に、サーダジヤ・ジユニア王は耳を傾けた。「何がもつたいなかつたのじゃ？」

クリスはまた口元を歪ませた。

「王は、コダマの言い伝えを知らないとみえますね」クリスは眼鏡をくいつと上げて続けた。

「『歌えば癒し、泣けば水晶……』」

「水晶とな！」

王が立ち上がった。

「そなた、今、水晶と申したな？　この世で一番高価な鉱石ではないか？　それをコダマが持つていてるというのか？」

「持つてているのではなく……これは私の調べた成果なだけで、全く信憑性はないのですが、どうやら涙を流すことで水晶が作られるようでございます。　それを確かめるためにここへ訪れたのですが……」

「無駄足だったようですねえ……」

大げさにがつかりするクリスに、サーバヤ　ジュニア王は同じようく残念そうに言った。

「そうじゃなあ。　今ここにコダマはおらん。　そなたら、残念だつたな」

「では、しばらくの間、森のなかで研究を続けてもよろしこでしょうか？」

「というクリスに、サーバヤ　ジュニア王はあっさりと快諾した。深々と一礼し退城するクリスの後ろ姿が消えた途端、サーバヤ　ジュニア王は杖を振り回した。

「今すぐコダマを捕らえてこい！　それと、さつきのクリスとやらを監視しておけ！　あやつらが先にコダマを捕らえた時には、横取りしてやるのだ！」

そして、前回コダマを捕らえてきたシーノとロックスを呼び出した。だがシーノはまだ城に戻ってきていない。ロックスだけが王の前に行き、この捕獲計画の指揮を取るように命ぜられた。シーノの事が心配で仕方ない上に、再びコダマ捕獲命令とは踏んだり蹴つたりである。

仕方なく部屋に戻つて森へ行く支度をしていくと、室内に一陣の風が吹いた。

「まさか？」

「そのままかだった。目の前に、ゴディが現れていた。

「おつ……お前、なんでここに？ シーノは！」

「ゴディは驚くロックスの腕をグイッと引っ張つた。

『すぐ来て！ シーノが……シーノが……』

今にも涙が溢れそうな瞳は、事の重大さを物語つていた。

「シーノに何かあつたのか！ だが……」

今のロックスは勝手に動けない身。

「だが、シーノの事が心配だ。

『あいつみたいに頭がよけりやあな……』

等と考えている場合じやない。身軽なシーノのよつて窓から飛び降りることも出来ない。

『ロックス、早く！』

急かすゴディに、ロックスは半ば焦りながら言つた。

「わ、わかった。すぐ行つてやりたいが、今は動けないんだ。またお前を捕まえる命令が出たんだ！」

その途端、ゴディは驚いてロックスの腕から手を離した。

『そんな……』

あの鉄籠を思い出したのだろう。その顔がこわばつている。

「俺はお前の味方だ。信じろ」

ロックスはゴディの肩を優しく抱いた。その体が恐怖で小刻みに震えている。

「とにかく、お前は逃げる。シーノの居場所は、説明できるか？」

「ゴディが口を開こうとしたその時、ロックスの後ろで

「あつ！」

と声がした。

「一」

驚いて振り向くと、開け放された扉の向こうに、一人の兵士が立つていた。

「ロックスさん、それ……」

その後ろから、また別の兵士が顔を覗かせた。

「どうした？ あつ！ コダマだ！」

部屋に分け入り、コディイを捕まえようとする兵士の手をすり抜け、コディイは窓から下へと舞い降りた。すぐに兵士は下にいる仲間たちに大声で知らせた。

「「コダマが行つたぞー！」

「まつ！ 待て！」

と言づロックスの言葉も届かず、兵士たちはわらわらと外へ駆け出していく。

皆、ロックスたちが貰つた報酬のことしか頭にないのだろう。ロックスたち自身、いまだに中身を確かめたわけではないが、重さから察するに、低給料の兵士たちには十分すぎるほどのものには違いない。

「くそつー！」

ロックスもまた、急いで外へと飛び出した。

城の前の広場には次々と兵士たちが集まり、屋根や壁をぴょんぴょん飛び回るコディイを我先にと追い掛けている。コディイも動搖して混乱している。やがて誰かが放つた矢が、コディイをかすめた。

《ひやあつー！》

声にならない声を上げてコディイはバランスを崩して地面に転落した。幸い高くない場所からだったので怪我はなかつたが、コディイはあつという間に兵士たちに囲まれてしまった。

《うひ……》

壁を背に、恐怖でおののいていたゴーティに兵士たちの手が襲い掛かった。その時、バシックという面と共に、兵士たちが後退りした。覆いかぶさつている影の下、恐る恐る見上げたゴーティは、目を見開いた。

『シーノー』

ゴーティを守るようになにかぶさつていたのは、銃弾に意識を失っていたはずのシーノーだった。

「これは、一体どうこうことだ?」

「ゴーティを背に兵士の方を振り向いて言ひやの肩には、まだ血がにじむ布が結ばれている。

「またゴダマ捕獲命令が出たんだ」

声の方を見ると、ロックスがみんなより頭一つ分大きな体をして兵士たちを分け入ってきた。

「ロックス……?」

驚いた顔をしたシーノーに、ロックスは刺激しないように冷静な顔をして言った。

「俺はその指揮を取るように命ぜられた。シーノー、お前もだ」
「あ」をひいて見据えたシーノーの言葉はもちろん『ノー』だった。

「俺が受け入れると思うか?」

少しにらんで言つと、ロックスは少し息を吐いた。

「……だろうな」

すると周りの兵士たちが声をあげた。

「逃がす気なのか?」

「いや、手柄を独り占めする気だ!」

「なんだとー最初に見つけたのは俺だ!」

「俺だ!」

「俺だ!」

声に押しつぶされそうに、ゴーティは耳を押さえて小さくなつてい

る。

「ロックス、俺は裏切り者でいい！」

「シーノ……」

つらそうな顔をするロックスの目の前でゴディを抱き抱えると、シーノは後ろの堀のうえに飛び乗った。

「逃がすな！」

「許すかあつ！」

兵士たちが逃げるシーノを追い掛けるのを、ロックスはただ見つめるしかなかつた。

「なんの騒ぎよ、これは？」

「？」

聞き覚えのある声に振り向いたロックスの前に、カリンが堀から飛び降りてきた。

「俺も混乱しているんだ。 シーノは怪我を負つていたようだし、ゴディは兵士に追われるし。 お前は何しに来たんだ？」

兵士たちはいっせいにシーノを追つて城の外に出ている。 誰も部外者のカリンをとがめる者はいない。 カリンは息が上がつている。

「シーノを追つてきたのよ！」

汗のにじんだ額をグイッと腕でぬぐつた。

「シーノはどこ？ 城に向かっていたはずなの！」

「シーノはゴディを連れて逃げて行つた。 お前はシーノに何がかったのか知つてるのか？」

カリンは半ば怒り呆れながら言った。

「知ってるわよ！ 銃で撃たれたの！ あんな怪我してまだ走るなんてどうかしてる！」

ロックスは目を見開いてカリンの肩をつかんだ。

「撃たれたつて！ 誰に！」

「そこまでは知らないわ。 森にいたら、シーノが誰かに追われて、撃たれたのを見ただけ…… あ、撃つたのは、赤い髪の女だったわ！」

カリンは逃れるようにロックスの手を離すと、
「急がないとシーノが貧血起こして倒れるわよー！」

と、ロックスをキッと睨んだ。

ロックスはあまりに色々なことがあった為に、まだ頭の中が混乱している。 見かねたカリンは声を荒げた。

「あなたは、何が一番大事なの？」

その言葉が、ロックスの心を貫いた。

カリソの過去

シーノはコディイを抱き抱えたまま森のなかを走っていた。兵士たちはとつこの昔に引き離した。突然、木の根につまづいて勢い良く転んだ。シーノの腕から放り出されたコディイはフワーンと着地したが、シーノの体はそのまま地面を滑つた。

『シーノ!』

不安そうに近づくコディイの前で、シーノは肩口を押さえてうめいている。傷口もふさぎ切つていらない状態で全力疾走をしたので、結ばれている布が真っ赤に染まっているばかりか、シーノの頭もフラフラと搖らぎだしている。それでもシーノは、コディイの力も借りながら力の出ない体を引きずつて近くの幹にもたれ、大きく息を吐いた。

「つ……！」

「コティイは肩を押さえて唸るシーノに駆け寄り、膝をついた。

『シーノ!』

彼は近くの幹にもたれると、フウッと大きく息を吐いた。
「城に行かせた俺が悪かった。すまない」

汗のにじむ顔で少し笑つてみせたシーノに、コディイは言った。

『また捕獲命令が出たつて……』

不安そうに言うコティイに、シーノは真顔で呟いた。

「あいつら、城へ行つたんだな……またジユニアの悪いくせが出た

……

悔しそうに唇を噛むと、力なく木にもたれた。

……

『これからどうするんだ?』

心配そうに言うコティイに微笑んでみせたが、

「なんとか、しなきやな」

と腑甲斐ない返事しか出来なかつた。

とりあえず、この傷をなんとかしないといけない。このままで「ゴティを守るぞ」ろかシーノ自身が野たれ死んでしまいかねない。「ゴティ、とりあえずどこかに隠れてろ！ 安全だと分かるまで、姿を現わしちやダメだぞ。俺は、兵士たちを裏切つて逃げてきた。だからあいつら、俺を追つてくるはずだ！」

言い聞かせるように言つたシーノだが、ゴティは首を横に振つた。

『やだ！ シーノと一緒にいる！』

だだつ子のようにペタンと座り込んだゴティは、また泣き出した。大粒の涙が水晶と変わり、ポロポロと落ちる。

「ゴティ……」

シーノは困り果ててしまつた。

その時、ガサガサッと草を分け入る音がしたかと思つと、二人の目の前にカリンが飛び出してきた。

「こんなところにいたのね？ すごい血！ 急いで手当てしないと！」

シーノの前に膝をつくその手には、大量の薬草が握られていた。

「こんなに出血して……頭ふらついてるでしょ？」

言葉にならないシーノの答えを待たずに、カリンはシーノの血で染まつた真つ赤な布を外し、傷の周りを清潔にし始めた。

「ゴティ、近くにきれいな湧き水の出る泉ないかしら？」

シーノの周りで動搖していたゴティは、しばらく考へると言つた。

『少し行つた所にある』

「案内して！」

カリンは自分の肩にシーノの怪我をしていない方の腕を担ぐと、

フラフラと立ち上がつた。

「カリン……」

シーノは何か言いたかったが、意識が薄れて頭の中が真っ白だつた。今自分が立っているのか座っているのかもはつきりしない。

「すまない……」

「謝るくらいなら暴れないで！」

半ば怒り口調で言うと、コディイが向かう場所に歩き始めた。体型は小柄なシーノだが、女のカリンには少し荷が重い。すぐにカリンの息があがってきた。

そこに、

「シーノ！」

大きな影が現れた。カリンは微笑みながら怒った。

「ロックス！ 遅い！」

「お前が速いんだ！ 僕に任せろ！」

と息を荒げて言うと、シーノをひょいと持ち上げた。

「どこへ向かってる？」

すぐにコディイが声をかけた。

《こつちー》

深い森の中、獣道を三人が駆け抜けた。しばらくすると、岩の間から湧き水が溢れる泉の前に出た。誰も入ったことはないのだろうか。

人の痕跡がない。静かな木の合間に、せせらぎだけが小さく響いている。口キが泉の脇にシーノを横たえるとナキは傍らに付き、布を泉で湿らせると傷口にそつと触れた。

「うつ！」

ビクンッとシーノの体が跳ねた。

「無茶しすぎよ。我慢しなさい」

呆れ口調でいいながら、手元は無駄のない手際の良さで手筋をしている。それを見ながら、ロックスは感嘆した。

「たいしたもんだな。あんた、一体何もんだ？」

カリンは手を止めることなく話し始めた。

「小さなときから、お婆ちゃんに『ダマの事を聞いてた。お婆ちゃんはいつも森や『ダマの事を気に掛けていたわ。本当なら森の中で迷い死んでた所を助けてくれたんだもの。だけど、自分ではどうしたらいいのか分からなかつた。ただ森の平和を祈るしかないと、お婆ちゃんは悲しげに言つてた。』

シーノも目を閉じたまま黙つて聞いている。

「あたしは、『ダマを見たことはなかつたけど、お婆ちゃんと同じ気持ちだつたわ。偶然にも、あたしの生まれ住んでた街は兵士の育成に力を入れてた。優秀な兵士を育てれば街は潤うから。だからあたしも、兵士になつてこの国に仕えれば、何かできるかもしれないって考えたわけ。でも……』

カリンの手が止まり、シーノは目を開けた。視線の先で、カリンが少し淋しい顔をしていた。

「女は兵士には不都合だつて。むしろ、周りの士気が乱れる原因になるつて」

「『デイもその心境を察して、淋しい顔をした。

「だから考えたの。兵士じゃなく、医者として訓練を受ければ、潜り込めるんじゃないかつて」

カリンは微笑んだ。さつきまでの悲痛さは消えている。

「みんな、『デイのためか？」

シーノが口を開いた。カリンは『デイを見た。

「『デイに会うまでは、お婆ちゃんの為だつたわ。あたし、お婆ちゃんが大好きなの。だから、例え『ダマの話が嘘だつたとして

も、……嘘つくような人じゃないけどね、でも……お婆ちゃんが喜んだり、安心する顔を見たかつたから。」

カリントマト手当を続けた。

「だが、どちらにしろ、兵士について戦地に向かわなくてはならぬいだろ？ その婆さんだつて、親だつて、心配するだろ？ が？」
言いながら、ロックは草を抜いてもあそんでいる。

「両親はいないわ。父は戦死した。母は、そのショックで精神的におかしくなつて、去年、眠るよう」

「……」

重苦しい空気が流れた。

「父も母も反対してたわ。でも、何故だか止まることが出来なかつた。一人とも大好きだつたのに、これだけは何故か譲れなかつた。一人が死んでも、気持ちは何故か変わらなかつた」

手当を終え、フウッと息を吐くと、ゴディを見た。

「ゴディに会つて、何か分かつた気がする。あたし、ゴディがすく愛おしいもの」

カリントマト笑顔を見せた。

「あたしは、多分、森に呼ばれたのね」
すると一人も見つめ合つて微笑んだ。

「俺たちも、きっとな」

そして三人が笑い合つと、ゴディはきよとんとしてその様子を眺めていた。ささやかに訪れた、静かな平穏の時間だつた。

城の中の騒乱

やがて誰からともなく表情が固くなつた。

「これから、どうする？」

ロックスの言葉に、シーノは何気なくゴーティを見た。すると、ビクッと体を震わせて訴えた。

『もう捕まつてみる？ なんて言わないよね？』

「え？ どういうこと？」

カリンがきょとんとして尋ねると、シーノとロックスは顔を見合させて苦い顔をした。

「なんなのよ？」

こうなつたら、カリンに隠し事はできないことを悟つた二人は、泣々話し始めた。

兵士たちの森荒らしを辞めさせるために、一田ゴーティを捕らえたふりをして、折りを見て脱走する計画をしたが、鉄に怯えたゴーティはうまく逃げられず、結局シーノが助けだした形になつたが、ゴーティにはかなりの苦痛を『えてしまつたこと』――

話を聞き終わると、カリンはガバッとゴーティを抱きしめ、シーノたちをにらんだ。いきなり胸の谷間に埋もれたゴーティは田をぱちくりしている。

「あなたたち、ほんと、最低ね！ こんな小さな子にそんなひどいことして、なんとも思わなかつたわけ？」

思つていた通りのリアクションに、二人は何も返せずにいる。

次にカリンはゴーティを胸から引き離すと、両肩を抱いたまま顔を近付けた。

「『ティ、何かお返ししたんでしょうね?』

《お……返し?》

『ティは完全にカリンの剣幕に押されている。

「そんなひどいことされて、なにも仕返ししなかったの?」

《う……?》

『ティはかるうじてうなづいた。

「うんつて……」

カリンは拍子抜けしたように肩を落とした。

『カ力の木が言つたんだ。助けてくれたんだから、許せつて。カ力の木の言葉は『ティの言葉。『ティは、シーノやロックスが大好きだ』

カリンは『ティの頭をぐりぐりと撫で、ひとつため息をつくと、優しく微笑んだ。

「そつか、自然にとつては、ちっぽけな事なのね」

《?》

『ティにはあまり意味が伝わらない感じだったが、カリンやシーノたちは、それが答えなのだと思つた。

やがてロックスが立ち上がつた。

「こんなところでくすぶついていても何も始まらん。俺は城の様子を見に行つてくる」

思えばロックスはほとんど丸腰だ。トレードマークの大型剣もない。

「俺も……つ!」

シーノも後を追うように立ち上がつましたが、眩暈を起こして膝をついてしまった。弾みで傷に衝撃が襲つた。

「つて……」

「無茶よ。 そんな体で動いちゃダメ！」

慌てて言ひカリンを、シーノがさえぎつた。

「俺がじつとしていられると思うか？」

そんなシーノをロックスが制した。

「お前はゴディを連れて城を逃げ出した。 一番狙われる立場なんだぞ。 困まれば、今のお前では逃げ切れんだろう？ 時を待て。 必ず運気は回つてくる」

悔しそうに見上げるシーノ。

「シーノにはあたしが付いてる。 ロックスは城を見てきて「カリンにうなづくと、ロックスはきびすを返して森の中へと消えた。

「くそつ！ こんな怪我さえしなけりや……！」

唸るシーノ。 カリンは周りをうかがうと、ゴディに尋ねた。

「ここは、煙が上がつても大丈夫かしら？」

『？ 火を使うのか？ ここは森の奥深い。 小さな煙ならゴト

イが風で飛ばしてやる』

ゴディは自慢げに胸を張つた。 それを見て、カリンは「ゴツと笑うと言つた。

「頼もしいわ。 煙なんて上げたら、あいつらに場所を教えるようなものだもんね」

「何をするつもりだ？」

黙つて聞いていたシーノが口を挟んだ。

「あなたは、とにかく滋養をつけなきや。」

「滋養つて……！ こんな時に飯なんて吃えるか！ つ……！」

シーノの口に布が押しあてられている。 すぐにシーノは力が抜け、静かに横たわつた。 驚いているゴディの前で布を払うカリン。 ハラハラと麻酔草が落ちた。

「うるさい人にはコレが一番ね。 さて、今のうち！」

カリンは

「シーノを見張つててね」

とコディに言い残すと自分も森のなかへ消えていった。後には、眠つてゐるシーノと、ポカんと立ち尽くすコディが残された。

一方ロックスが城に着くと、異様な雰囲気に襲われていた。城の中が静まり返つてゐるのだ。門番を普通に抜けてきたが、城の中にも外にも兵士の姿がない。

「……？」

嫌な予感が胸を刺すなか、周りを伺いながら武器庫へと向かつた。誰にも知られずに武器だけを持つて出られるならそれでもよかつたが、城の様子がおかしすぎるのが気になり、自分とシーノの剣を手に取ると、広間の方へ足を運んだ。

扉は大きく開かれていた。ロックスはそつと忍び足で近づくと中を覗いた。中には、全員と思われるほどの兵士たちが集まつていた。

『一体、何をしてるんだ？』

視線を巡らせてみると、聞きなれない声が聞こえた。

「私たちに従いなさい。そうでなければ、この国」と破壊します『誰だ？』

サーデヤ ジュニア王の声ではない。まだ若く張りのある声だ。『あなたがたは、何のために生きているのですか？ みな、自分の幸せのためにこの城を守り、繁栄を助けているのでしょうか？』

「それは、そうだが……」

誰かが声を発した。それを受けて別の兵士が言った。

「だが、我らの王を死に追いやつた奴を許すわけにはいかない！」

その声に、武器を構える音があちこちであがつた。

『死に追いやつた?』

ロックスのいる場所からは広間の奥までは見えない。

すると主犯格と見られる若い声がゆつたりとした口調で響いた。
「この人は弱すぎたのです。世の中は弱肉強食。強く賢いものが人のうえに立つ。これが自然の摂理というもの。あなたがたは、弱く無知な人を崇め祭り、国が栄えると思つてはいるのですか?」「ぐ……っ

兵士たちが言葉を失つた。

「このクリス・ゴードンこそが次の王になります。従えなければ、出でつて構いませんよ」

なんとも勝ち誇つたよつた声だ。ロックスはたまらず広間に駆け込んだ。

「何を勝手なことをしてやがる!」

ロックスの声に驚いた兵士たちが振り向き、同時に奥までの隙間があつた。

「! 王!」

目を見開いたロックスの前に、ゴロンと横たわつたサージャージュニア王の姿が見えた。

「どうこうじだあ!」

するとクリスは口元を吊り上げながら言った。

「弱いものが強いものに逆らつたらどうなるかを、皆様に教えただけです。それとも、あなたもこの肉の塊に一生を捧げるつもりだったのですか?」

ロックスは体がどうしようもなく熱くなるのを感じていた。

『怒り』

それに任せて暴れるのもいいだろ？ だがそうすれば、ここにいる何人の仲間たちを失うかもしれない。一瞬で様々な感情がロックスの中を駆け巡り、ひとまずここは抑えることにした。

だが、治まつたわけではない。

「おまえは一体、誰なんだ？」

低い声で絞りだすのがやつとのロックスに対し、クリスは指先で眼鏡を上げながら勝ち誇ったような口振りで答えた。

「私はこの国の王です」

「勝手なことを言つな！」

口調が少し強くなつた。グッと握る両拳が震えている。するとクリスはいぶかしげな顔をして尋ねてきた。

「それあなたは、誰なのですか？」

「お前には関係ないだろ？ いますぐこの城、いや、この国から出ていくんだ。 そうしたら、見逃してやる！」

そういうロックスに向かつて、クリスは首を傾げた。

「それはあなたが指図することではありません。 おとなしく私に従えば良いのですよ」

ロックスはすでに、我慢の限界に来ている。

そんなロックスに、クリスは淡々と続けた。

「あなたも富を得たいでしょ？ ロダマを手に入れることができれば、一生遊んで暮らせます。 私たちは汗だくになつて働かなくとも良いのですよ」

空を仰ぎながら妄想に更けるように話すクリスに向かつて、ロックスはゆっくりと歩を進めた。クリスは怯える様子もなく、腰に手を置いて立つて居る。

悠然と。

ロックスは彼の前まで近づくと、静かに言った。

「もう一度言ひ。 いますぐこの国から出でいくんだ」

クリスを見下ろすロックスの瞳は怒りに震えている。 ク里斯はそれをものともせずに見上げている。 その時誰かが声を出した。

「やつぱりゴダマを独り占めする気なのか！」

それに呼応するように次々に声が上がった。

「そりか、やつぱりシーノとグルなんだ！」

「よくもノコノコと来たな！」

兵士たちの矛先がロックスに向けられた。 ク里斯は面白そうにその様子をうかがつていて。

「なんだか、騒がしくなりましたね」

クスクスと笑うクリスの前で、ロックスは困惑気味に周りを見回している。 鷹倒はすっかりロックスに対してものだ。

「な、何を言つてゐんだ！ 皆、一一つにだまされているだけだ！」

「ゴダマの居場所を知つてゐるんぢやないか？」

「もしかして、もうゴダマを捕まえてゐるんぢやないか？」

「俺たちをだましてゐるのはお前だろつ！」

ついに兵士の手がロックスの武器に触れた。

「城から出すわけにはいかない！」

武器を取り上げようとする兵士の手を振り払い、ロックスは後

退りをした。 だが後ろはクリスたちが固めている。

「……！」

ロックスは意志を固めた。 手にしていた剣を振りかざすと、兵士たちを薙ぎ倒した。

「うわあっ！」

「やつぱり裏切り者だあっ！」

『すまん！』

ロックスは心のなかで叫びながら、あくまで峰打ちで仲間たちを殴り倒していく。とりあえず外に出なくては……あまりにもロックスにとって不利な状況だ。覆いかぶさつてくる者を振り払い、一瞬で裏切り者になつたロックスは広間を飛び出した。

「待てー！」

追い掛けてくる兵士たちの向こうに、悠然と立つてゐるクリスの姿があつた。

「ゴディとサクラ

一方、麻酔草で眠らされているシーノの前で、カリンは焚き火をし、採つてきた魚を焼いていた。

だいぶ日が暮れた森の中。辺りは香ばしい香りに包まれ、静かに流れる小川の音にパチパチという薪が弾ける音が重なつて、ゆつたりとした空気が流れている。少し離れて、ゴディがたまに風を起こしては、煙を吹き流していた。火を怖がるゴディは、それでもシーノのために何か手伝いをしたがつた。

「ゴディ」

カリンは火に薪をくべながら静かに言つた。

「これからどうなるんだろう、あたしたち……」

ゴディは首をかしげた。それを見て、

「そうね、あなたにはちっぽけな事だもんね」と、ふつと笑つた。

そして、少し真顔になつた。

「でもあたしは、ゴディを守りたいと思うのよ。だけど不思議なくらい心が穏やかなの。何故かしらね」

独り言のように呟くカリンをじつと見ていたゴディがそつと尋ねた。

『サクラと言つ名前か?』

「?」

ゴディは、につと笑つた。

『カリンの横顔を見て、思い出した。カリンはサクラによく似てる

彼女は驚いた顔をした。

「サクラは、おばあちゃんの名前よ。ゴーティ、やつぱつおばあちゃんに会っていたのね？」

嬉しそうに言うカリンに、ゴーティはこいつと微笑んだ。

『性格は似てないけど』

「一言余計だわ！」

カリンは一瞬頬を膨らませて見せたが、すぐに笑顔に戻った。

「ね、覚えてる？ 若いときのおばあちゃん。一体何があったの？」

ゴーティは少しずつ思い出すように話し始めた。

『サクラと初めて会ったのは、今からずっとずっと昔。サクラは泣きながら森の中をさ迷っていた。しばらく見ていたけど、町からは離れて行くし、疲れ切つていて今にも倒れそうだから、果物を差し出したんだ。本当は人の前に姿を見せちゃダメだって力力の木に言われてたんだけど、なんか自然と体が動いてた』

サクラは目の前に立つ、自分より少し小さくくらいの背丈をした、緑色の瞳の子供に驚いた様子で泣き止んだ。ゴーティの持つ果物に気付き、それを凝視している。ゴーティがそつと差し出すると、サクラは恐る恐る手を伸ばした。

「ありがとう」

小さな鈴のような声で言うと、近くの木の根に腰掛け、裾で果物を少し雑に拭くと、一気にがぶつとかぶりついた。

ゴーティは近くに同じように座ると、その様子を眺めていた。

ひたすら果物をむさぼり食べていたサクラは、一息ついて やつと笑顔になった。

「ありがとう。お腹すいてたの。おうちが分からなくなっちゃつて……あなたはこの近くに住んでるの？」

「ゴディはにっこりと微笑んだ。

「そり、あたしが住む町は遠くなのかなあ？　あなた、分からない？」

不安そうに言うサクラに、ゴディは手を挙げて指差した。その方は、サクラが歩いてきた方角だつた。

「あつち？　あたしつたら、反対の方に来ちゃつたんだ。どうしようもう疲れちゃつた……眠いし……」

空腹が落ち着いたので、疲れが一気に吹き出したのだろう。サクラの瞳はすでに半分ほどしか開いていない。ゴディは立ち上がりてサクラの裾を引っ張つた。

「？　ついてこいつて？」

「ゴディは大きく一つうなずくと、サクラを誘つた。

辺りはだいぶ日が暮れて、たくさん木の葉が余計に暗くしている。ふらふらと歩くサクラを、ゴディは何度も振り返りながら誘導した。

しばらく歩くと、目の前には田を見張るような大木が現れた。一回息を呑んで、サクラは田の前の大木を見上げた。

「大きい……」

それだけしか出でこなかつた。月明かりに照らされた木の葉が緩い風になびき、静かにゆれている。我を忘れたように見上げたままのサクラをゴディが促した。

「あ……ああ」

手を引かれるがままに、サクラは大木に近づいた。

「どこに……行くの？」

太く横たわつた根を乗り越えて裏に回ると、大きくくほんだところがあった。中に入ると、子供一人がちょうど納まる位の広さだ

つた。暗がりの中でそつと座ると、落ち葉が敷き詰められていて、ふんわりと受け止められた。壁にもたれると、小さな音が聞こえた。

「…何の音?」

《力力の木の吐息》

「?」

サクラは頭に入り込んだ、声に似た音に驚いて、周りを見回した。隣には小さく体操座りしたコダマがいる。サクラは少し考えて、そして言った。

「…もしかして…あなた?」

「コダマはにっこりと微笑んだ。

「あなた、話せるのね?」

話相手が出来たことで、サクラの心がさつきまでよつも落ち着いた。

「あたし、サクラよ。あなたは?」

《みんなは、コダマと言ひ》

「コダマ…コダマ、よろしくね」

ホツと一息付いて、サクラはまた壁にもたれた。

「なんだかいい気持ち…小さな音が聞こえるの」

《力力の木の息だ》

「この大きな木、力力の木というのね? この音は、生きてるっていう音なんだ? 気持ちいい…」

言いながら、サクラはスースと眠りについていった。

その横顔を見ながら、コティは田の前のカリンとサクラを重ねていた。

カリンは嬉しそうに話した。

「おばあちゃん、ホントに子供だったのね? それで、どうやって

町まで帰つたの？」

「コディは緑色の瞳をぐるぐると回した。

『遊んだ』

「え……遊んだ？」

サクラは新しい友達にすっかり嬉しくなり、それからしばらくの間、コダマと過ごした。森の中は、コダマがいれば迷うことはない。力力の木とババの木に自己紹介したサクラは、コダマとともにそこらじゅうを走り回り、お腹が空けばもぎれる果物はたくさんあつた。そして眠くなければ力力の木に帰り、眠る……。そんな生活が何日か続いた。

一方町では、森に遊びに行つたまま帰つてこないサクラを心配して、両親を筆頭に何十人という人が森を搜索していた。そしてサクラは、小さな泉の畔で花を摘んでいる時、皆に発見された。

涙で崩れた表情の両親の腕の中で、見回したどこにも、コダマの姿は無かつた。数日間果物ばかりだったこともあって体重も落ちていたし、サクラがいなくなつたのも『神隠し』だと信じ込まれていたので、サクラの言つ『コダマ』も、必然的に悪者だと考えられた。

サクラがどんなに、助けてくれたのはコダマだと言つても、両親も町の人たちも信じることはなかつた。だから次第にサクラもコダマと過ごした日のことは心に秘め、静かに過ごすことにした。それがコダマの為だと考えたのだ。それから何度も森へ行つたことがあるが、コダマがあらわれることはなかつた。サクラもまた、無理に探すこともしなかつた。

大切な思い出。

サクラは森とともに生きるコダマの事を、ずっと案じることにした。誰にも無理強いすることなく、自分の心のなかだけで。そ

う、カリンが生まれるまでは……

新しい国王の誕生

「おばあちゃんは、あたしに一生懸命話してくれたわ。死んじゃう前に、カリンには話しておきたいんだって。『ドーティの事を話す時のおばあちゃんは、とても幸せそうで、楽しそうで、あたしでも幸せな気持ちになつたわ』

『ドーティはこつこつと微笑んだ。

「それにしても、迷い子と何日も遊んでるなんて、『ドーティも子供だよな』

「シーノ？ いつから気付いてたの！」

驚くカリンを白い目で見ながら、シーノは肩肘を付いて寝そべつている。

「なあにが、いつから？ だ！ 人を氣絶させておいて！」

「変な事言わないで！ 少しでもおとなしくしていて欲しかったのよー！」

むきになつて言つカリンを無視して、シーノは『ドーティに笑いながら言つた。

「そんなことよつせ、『ドーティは一体何歳なんだ？』

『？』

きょとんとしている『ドーティをギュッと抱き締めたカリンがにらんだ。そして

「年なんて関係ないのよー それより、わ、沢山食べて栄養取るのよー！」

と、香ばしく焼き上がった魚を差し出した。それを押し退けたシーノはにらみ返していった。

「俺にそんな時間なんてないんだよっ！」

「あなたにとっては、食事も大事な時間ですっ！」

カリンは問答無用とばかりにぐいっと魚を口のなかに押し入れた。

「！ んぐっ！」

『なにすんだつ！』

声にならない叫びを氣にもせず、カリンもまた焼きたての魚に口をつけた。

「シーノは、ゴディにとつて大切な人なの。 無茶なことをしてなんとかなる状況じゃないことくらい、あなたも分かるでしょ？」 視線を外して静かに話すカリンの言葉が、シーノの心に響いた。 おとなしく食べ始めたシーノは、ボソッと呟いた。

「ごめん……俺も焦つてた」

カリンはシーノを横目で見た。

「人数は少ないけど、ひとりじゃない。 時間を有効に使って、考えなくちゃ」

カリンはシーノが食べおわるのを見ると傍に寄り添い、傷の手当をしあげ始めた。 その様子を見つめながら、 「カリン、君と会わなかつたら、多分今ごろは何をやつてたかわからんな。 感謝……しなきや」

すると、少し顔を赤らめたカリンは、

「ばか」

と一言呟いて、手当を続けた。

空が明るんできた頃、シーノは左腕を挙げてみた。

「……どう？」

心配そうに見守るカリンに、シーノは少し微笑んで見せた。

「まだ痛みはあるけど、どうにかなりそうだ」

ぐるんっと腕を回すと、勢いつけて立ち上がった。

不安そうに見上げるカリン。

シーノは城がある方角を見た。

「ロックスが心配だ」

「シーノ、まだ……」

膝を立て、立ち上がるうとするカリンの肩を押された。

「ゆっくり休めた。栄養も摂れた。大丈夫だ。あとは俺を信じる。もう暴走はしないから」

にっこり笑うシーノ。だがカリンは、相変わらず不安そうな顔で瞳を潤ませている。

「カリンは、ゴディを守つてカ力の木に居て。そこで落ち合おう行こうとするシーノの背中に、カリンの声が飛んだ。

「シーノ！」

「？」

振り返ったシーノに駆け寄ると、その手に小さな袋を渡した。

「これは？」

中を覗くと、小さな錠剤がいくつか入っていた。

「痛み止めよ。もし痛みが気になるようなら飲んで！ カリン特製だから、きっと効くわ」

そう言うカリンに、シーノがいたずらっぽく微笑んだ。

「気絶させられなきゃ、いいけど」

「！」

カリンが手を挙げた時には、既にシーノの姿は消えていた。

「もう……」

淋しげに下げる手を、ゴディが優しく握った。見上げて微笑んでいるゴディに、カリンも微笑み返した。

「カ力の木に行きましょう！ きっと、一人とも元気に帰つてくるわよ！」

城の中には、倒れてうずくまる兵士たちが何人かと、クリス達が居た。

「たいしたものですね、誰一人として命を落としていないとは」
フフン、と鼻を鳴らすクリスの元に、一人の兵士が戻ってきた。
そしてクリスの前に膝をついた。

「も、申し訳ありません。森の中で見失ってしまいました」

それを冷たく見ながらまた鼻で笑い、ゆっくりと眼鏡を上げた。
「すぐに見つかりますよ。コダマもね」

クリスの口元がにやりと怪しく吊りあがる。その横で、赤髪のセツナが静かに無表情で立っていた。

その時、男が風のように入ってきた。

「クリス様。奴らの目的地が分かりました」

その男は、クリスに影のよう付いている男達の一人だった。

クリスは一つうなずくと、

「行きましょう」

とセツナに一言かけて広間を出て行こうとするクリスに、先ほど

の兵士が声を掛けた。

「あつ……あの、私達は……」

「フン、そうですね、居ないよりマシでしうから、動けるのじ
たら付いてきても構いませんよ。ですが、足を引っ張らないよう
に」

冷たい口調だったが、倒れていた兵士たちもワラワラと立ち上が
つた。ここに、新しい国の王が誕生したのだった。

戦闘開始！

森の中では、やつと兵士達を振り払つたロックスが息を荒げていた。近くの木にもたれかかり、剣をドンッと地面に突き刺した。

「やばいな…… 大変なことになつた……」

東の空が明るくなつていて。鳥がさえずり始めた。朝露を含んだ涼しい風が、汗ばむロックスの体を気持ちよく撫でた。だが、彼の心の中は穏やかではない。

『城がのつとられた』

そのうち町にもその手は伸びるだらう。そうなれば、国をのつとられたも同じだ。

「あのクリスつてやつ、何とかしないと……」

その時、ザザッと木の枝が揺れ、ロックスの目の前に人影が下りてきた。

「ロックス！ 大丈夫か？」

心配して駆けつけたシーノだった。

「！ キズはもういいのか？」

「心配するな！ それより、城はどうだつた？」

ロックスの疲れた姿を見て、シーノはただならぬ予感がした。彼はおもむろにシーノへ剣を差し出した。

「適当に手に取つてきたが……」

「充分だ！ ありがとう」

シーノは剣を手にすると、手馴れた様子で素振りをした。空気が裂ける音がした。そして周りに誰も居ないのを確かめると、シーノはロックスを促した。

「とにかく行こう！ カカの木で、カリン達が待つてゐる」

二人は周りを気にしながら森の中を進んだ。

歩きながら、ロックスは城の様子を伝えた。それを聞いて、シーノの心もざわついた。

「クリスのやつ、ジユニアを……」

「横暴なところがあつたとはいえ、自分の主だつた人物だ。そして、突然現れた奴に殺され、城をのつとられた。

「世の中は弱肉強食なんだ。そんなこと、分かつてる。だが、やり方が悪い。あいつきっと、頭はキレると思うぜ」

「ああ、生半可な学習はしてないみたいだつたから。全て計算づくりのかもしけない。あいつにとつては……」

『手の中で踊らされているのかも……』

悔しそうに唇を噛んで、シーノたちは力力の木へと向かつた。陽もだいぶ昇つて、明るい日差しが木々の間を降つてくる。近くを小川が流れているのか、水の流れる音が聞こえてくる。

「ロックス、もう少しだ。この先に力力の木がある」

そう言つて、だいぶ息の上がつてているロックスを励ました。不意に、一人の周りに不穏な空気が漂つた。

「「！」

身構えた二人の周りに、四つの人影が現れた。

「付けられてたのか！」

ロックスの悔しそうな口調に呼応して、シーノも唇を噛んだ。

「こいつら、クリスについていた奴らだ！」

シーノが初対面した時に囮んだ男達だつた。

黒っぽい服にフードを被り、にやけた口元だけが見えている。その中の一人が口を開いた。

「ゴダマの場所が分かれば、お前らに用は無い」

楽しそうにもれる笑い声が、二人の気分を害した。

「ふざけるな！ お前らにゴダマは渡さん！」

言つが早いが、シーノの姿が消えた。

得意のスピードで翻弄させようと、シーノは木々を走り巡った。男達は一瞬何が起こったのか分からず、オロオロと周りを見回していたが、すぐに、木にもたれて息を整えているロックスを見定めた。

「！」

『やばっ！』という表情をしたロックスは、急いで剣を構えた。土が大胆に散った。

ロックスに向かう2人の男達の背後から、石つぶてが飛んだ。後頭部を攻撃され、足元がふらついた男達の横っ面を、

ブーンッ！

と大ぶりの剣がなぎ払った。

「うわあっ！」

二人はあっけなく吹き飛ばされた。

その頭上にシーノの足が揃つた。

「！」

驚く一人の顔面を思い切り踏みつけ、シーノはロックスの方に親指を立てた。

当のロックスは、他の一人の相手に忙しそうだったので、シーノは懐から鎌鎌を取り出した。

狙いを定めると、ロックスに向けて投げた。

投げられた鎌ガマは器用に一人の男の足に絡まり、バランスを崩して倒れた上から、ロックスの剣が振り下ろされた。

「残りは一人か！」

後退りをしながら、男はそれでも口元に笑みを浮かべている。

「仲間はクリスさんを呼びに行つた！ あんたらも觀念したほうが良いぜ！」

そういうが早いか、男はロックスに立ち向かって行つた。もはや特攻に近い状況だつたが、男は冷静にロックスの剣裁きを見極め

ながら次第に追い詰めている。シーノは少し離れたところから一
人の様子を見ていた。

こんなとき、手助けをしようとなればロックスはかなり怒る。
逆もそうで、気持ちが分かっているシーノはただ見守っていた。
同時に、またうずきだしている肩の傷を癒すために、そつと懷に手
を伸ばすと、カリンに貰った小袋から一粒の塊を取り出した。錠
剤とは呼べないほど雑な形をしているが、無いよりはましだ。

『氣絶しませんように』

と祈りながら、『ぐんと飲み込んだ。そして、刀がぶつかりあ
う音を聞いていた。シーノは今すぐにでも飛び出して行きたかっ
たが、必死で抑えていた。ロックスはすでに息が上がっている。
相手の男も相当のてだれのようだ。中肉中背の体型に似合わず、
力が強い。と言つより、相手の力をうまく使いながら流していく
戦い方は、ロックスの体力を吸い取るようだ。そして、訓練を欠
かさないロックスでさえも圧倒するようなスタミナを持つているの
が、剣を通じて感じられた。追い詰められていくロックスを、シ
ーノは汗ばむ額を拭きもせずに見守っている。薬が効き始めたの
か、または戦いの空気に興奮しているからか、傷の痛みは感じられ
なくなっていた。もはや、そんなことはどうでもよくなっていた
のだ。木を背にして、とうとうロックスは追い詰められてしまつ
た。シーノは思わず飛び出した。それに気付いたロックスは叫
んだ。

「来るな！」

「くつ……！」

踏みとどまつたシーノを男は横目で見ながら、またニヤツと微笑
んだ。

「男の戦いだから、手助けは無用だと？ 僕も舐められたもんだ」
剣を合わせたまま、男は首をひねつた。

「来いよ。一人まとめて相手してやるぜ」

「！」

その挑発にシーノは思わず剣を抜いた。ロックスは叫んだ。

「シーノ落ち着け！ここは俺に任せろ！お前はカリンの所へ急げ！あいつらが向かってるかもしれない！」

力任せに振り払うと、男は弾かれたように離れた。

「ロックス……！」

シーノは胸を切り裂かれるような思いだつたが、ロックスを信じることにした。自分が居たところで、気になつて動けないかもしれない。シーノは悔しそうに剣を収めた。

「力の木で、待つてるからな！」

そしてきびすを返した時、男は声をかけた。

「行っちゃうの？」

にらみ返したシーノに、ニヤッと笑うともう一言付け加えた。

「殺しちゃうよ？」

「行け！シーノ！」

ロックスは男に剣を振った。器用に避ける男を尻目に、シーノは振り払うようにその場を離れた。

『ロックス、必ず来いよ！』

心のなかで叫びながら、シーノは力の木へと急いだ。

ロックスとルイスの闘い

改めて対峙した二人は、少し離れて向かい合つた。息を吐き捨てるようにロックスが言った。

「なかなかやるじゃないか」

すると男も剣を軽く振り、息をついた。

「あんたもね、ロックスさん」

「お前の名は？」

「ルイス・サナル。あんた、城に仕えてる兵士のひとりなんだろう？」

「ああ。お前らが殺した王に仕えていた」

「飛び出したいと、思わないのか？」

ロックスは急な質問に戸惑つた。

「大勢のなかの一人、それで満足なのか？　名声、富、欲しくないのか？」

「何を言いたい？　勧誘なら断る！」

ロックスは、ルイスの言いたい事がまつたく分からない。

ルイスは急に戦意を落としたように、木にもたれ掛けた。

「？」

戸惑いを隠せないロックスの前で、ルイスは遠くを見た。

「俺はずつと裏の世界で生きてきた。親なんて知らねえ。物心ついたときには、強奪、脅迫、盗み……それがまつとうな道だと思つて生きてた。仲間が増えると取り分が減るから、大きなことをする以外はできるだけ一人でいた。そんなときさ、クリスさんに出会つたのは。クリスさんは、俺に静かに語り掛けた。そりや、最初は『なんだこいつは？』って思つたさ。けど、クリスさんは何度も何度も話し掛けてきた。最初はたわいもない事ばかりで、

無視してた。

興味本位で来る奴の相手してやる筋合いなんてない

し。 けど、そのうちになんか、『こいつは何か違う』って思い始めた。 人生論とか難しいことを言つてたかと思うと、他の国の話をしだして……俺が正しいと思っていた生き方が、本当は逆で、今に排除される運命なんだつて。 それに勝つには、大きな力がどんなに必要か、広く深い知識がどんなに必要か、クリスさんは一生懸命話してくれた。 ク里斯さんは、そんな俺たちの力になつてくれると言つた。『知識は私に任せて、あなた方は行くべき道を開き、守つてくれれば良い』と。だから俺は壁になることにした。さつきお前らにやられたあいつらも、同じような境遇の奴らさ。』 ルイスは話に区切りを付けると、懐かしい思い出話だ、と軽く笑つた。 そして剣を握る手に力をこめると、キッとロックスを睨んだ。

「だから俺は、クリスさんの行く道を守る！ 草一本だつて邪魔させない！」

そして一気にロックスへ攻め立てた。 彼はそれをからうじて受け流しながら、剣がぶつかりあう音の中で言つた。

「クリスつて、一体何者なんだ？」

「俺にもわからねえ。 けど、守りお仕えするには最高に尊敬すべき人だ」

ルイスにもまた、信じる人がいた。 そしてロックスにも……

「俺も同じだつ！」

ルイスの剣を、体共々厭ぎ払つた。 ルイスは身軽に着地すると、再び剣を構えた。 ロックスは続けた。

「あんな人でも一国の主。 俺は、先代が愛し守りぬいたこの国が大切だ。だから俺たちが尊敬してやまなかつた先代のようになつが、なつてくれる信じてた。」

するとルイスは鼻で笑つた。

「でも裏切つた」

「違う！ 俺は……！」

ロックスもまた苦しんでいた。

「いや、そうだ。主と友、どちらを取るか悩んだ。結局俺は、友を選んだ。正しいと思つたから……自分の信じる道を選んだ」

ルイスは嬉しそうにニヤッと微笑んだ。

「信じる道を……俺たちと同じじゃないか。仲間になろうぜ！」
ルイスの剣先がロックスの頬をかすめ、一筋の赤い鮮血が流れた。
それを拭いもせず、ロックスもまた攻撃を続けた。
「仲間だと？笑わせるな！クリスのやううつとしていることは、
間違っていると思わんのか？上を狙つなら、もっと違つ道がある
！」

もはや一人はあちこちに傷を負い、体力もだいぶ消耗している。
どちらかが気持ちを落とした時に決着がつく、そんな予感を感じ
させていた。息を整える間もなく、お互いは全力でぶつかりあつ
ていた。すると、その剣の振動が言葉となつて、お互いの心に流
れ込んだ。

似ている……信じるものを見つけるために命懸けで戦う姿が。ロックスは何か通ずるものを感じ初めていた。不意にルイスの手が緩
んだ。

「？」

ロックスは怪訝に思いながら少し離れて息を整えた。ルイスは剣を下ろし、頬を伝う自分の血を指先で拭い、しばらく眺めていた。

「どうした？」

田を離さず、ロックスは構えていた。ルイスは嬉しそうにニヤ
ツとほほ笑みを見せた。

「同じだな」

「？」

「俺とお前、同じ血が流れてる。こんなに全力で戦える相手と巡
り合えて、俺は今、すごく嬉しい」

ロックスはルイスから殺氣が消えたのを感じ、剣を下ろした。

珍しくズンと重い感触が腕を引っ張っている。

「俺もだ。 しばらく戦いもなかつたが、なまつていた体が気持ちよく田覗めたぜ」

そう言つてロックスも同じようにニヤッと微笑んだ。

ルイスは剣を一振りして鞘へと納めると、両手を下ろした。

「俺はもう満足した。 戦う気はない。 仲間の所へ急げ。 ク里斯さんたちがもう着く頃だ」

「ルイス？ お前はどうするんだ？」

「言つただろう、お前と戦う気はもうない。 俺のことは気にするな。 行け！」

ロックスは少し考えた。

「ルイス、行くところがないなら俺たちの所へ来い。 あいつらも話せば分かる奴ばかりだ。 安心しろ」

ルイスは両手を腰に当てて肩をすくめた。

「考えておく」

少し唇の端を上げ、ロックスを手で払う仕草をした。 それを見て、ロックスもにっこり微笑み返すと、ルイスに背を向けた。

「ドンツ！」

「？」

ロックスは背中に熱い感触を覚えた。

「な……なんだ……？」

「甘いよ」

耳元でルイスがささやいた。 背中にぴつたりとくっついている。

ロックスは動けずに視線だけを後ろに向けるように言つた。

「ルイ……ス？ お前……」

クスッと笑つた吐息がロックスの耳をくすぐつた。
「教わらなかつたか？」『人を簡単に信じるな』と
「だました……のか？」
ロックスは呼吸が苦しくなつていた。息が体に入らないのだ。
身体中を冷や汗が包んだ。

ザンツ！

後ろから勢いよく蹴られたロックスはそのまま地面に倒れた。冷たく見下ろすルイスの手には短剣が握られ、剣先からはポタポタと鮮血が滴っている。

「クリスさんも言つてただろう？ 世の中、弱肉強食だ。 剣を交わした相手は必ず仕留める。 僕はそうやって生き延びてきたんだ」「くつ……」

ロックスは悔しさと痛みに顔をゆがませながらルイスを睨んだ。それを冷たく反らすと、遠くを見た。

「今頃、さつきのシーノとか言つ奴も、クリスさんに殺されてるんだろうな。」

クスクスと含み笑いをして、またロックスを見下ろした。
「俺はクリスさんだけを心底信じてる。 人生を変えてくれただけじゃなく、生きる希望を与えてくれた」

そして短剣をロックスの際にぐさりと差すと、優しく言つた。

「ま、ゆっくり眠りなよ。 すぐにお仲間さんも行くからさ、淋しくないよ」

そういうと、ロックスの脇を歩き去ろうとした。 ところが、ルイスの足が止まつた。 足元を見たルイスの目に、ロックスの手が映つた。

「この……死にぞこないが！」

その手を振り払おうと足を蹴りあげるが、ロックスの手は離れる気配はなく、むしろ力が込められた。

「つ！ 離せ！」

ロックスはグンッと力を込めると、一息で投げ飛ばした。 不意を突かれたルイスの体は木に叩きつけられた。

声にならない声を出して、ルイスは背中を押さえてもがいた。ロックスは大剣を杖がわりに、フラフラと立ち上がった。その目には明らかに怒りが芽吹いていた。

「一瞬でも気を許した俺が馬鹿だつた。お前とは何一つ交わるものはなさそうだ。」

そして剣を振り上げた。それを見上げながら、ルイスは顔を恐怖でゆがめ、両手を上げて懇願した。

「たつ！ 頼む！ 許してくれ！ クリスさんの弱点を教える！ だから命だけはっ！ 頼む！」

そう叫ぶルイスを熱くたぎる瞳で見下ろしながら、ロックスはジリジリとにじり寄つた。ルイスの後ろは木にはばまれ、自由のきかない体はひたすら幹に押しつけられるだけ。ルイスはなおも言い続けた。

「なあ、頼むよ！ あんただつて人だろ？ 命の大切さが分かるだろ？ 愛する人を残して死ねないだろ？」

ロックスの腕がピクッ と反応した。

「愛する人だと？」

「そうだ！ 僕は将来を約束した女を町に残してきてる！ いつか陽のある場所で生活できるようになつたら、迎えに行くんだ！ だから、頼むよお！」

もはや泣き叫ぶように訴えるルイスを見下ろしていたロックスは、ハアッと一つため息をつき、剣をドサッと下ろした。剣先が地面に突き刺さつた。啞然としているルイスに、

「どこまでも可哀相な奴だな、お前は。お前自身、愛する人について何が一番必要なのか、もう一度考え直せ…」
と言ひ捨てると、背を向け歩き始めた。

その後ろ姿を見るルイスの顔が次第に緩み、懐からナイフを取り出した。そして

「それが甘いんだよ！」

と言いながらナイフを振りかざした。が、その手がぴたりと止まり、ナイフは地面に落ちた。力なく腕が落ち、その胸には短剣が貫いていた。

「ま、さか……」

ロックスの剣が地面と共にさつきの短剣をえぐり飛ばし、ルイスの胸を刺したのだ。

「その言葉、そつくりそのまま返すぜ。夢の中で一国一城を築くんだな。お前とは、いいライバルになれる気がしたのにな」振り向いたロックスが悲しげにそう言つと、ルイスもにっこり笑つて呟いた。

「違う世界に……生まれたかった……」

そして眠るように目を閉じ、動かなくなつた。その顔に苦痛はなく、むしろ安心しきつた子供の眠り顔のようだつた。ロックスはそれを切なく見つめ、自分の上着をルイスの頭から優しくかけた。

「生まれ変わつたら、また戦おうぜ……」

そう言つて、ロックスもまた地面に膝を突いた。

「……シーノ、ゴティを……頼む」

そして氣を失いながら倒れこんだ。ロックスの背中を鮮血が覆つっていた。あとには、木々を揺らすそよ風が静かな時の到来を知らせていた。

力力の木へ向かうシーノは、何か嫌な胸騒ぎを感じていた。思わず振り向いたが、深い森が視界をさえぎるだけだ。

「ロックス……」

心配に思いながらも戻りたくなる思いを必死で抑えて、シーノは力力の木へと急いだ。

『ロックス！ 必ず力力の木へ来いよ！』

カリンとクリス

カ力の木の根元には、大人がすっぽり隠れられるほどの横穴が開いている。小さな子供なら、一人充分遊べる広さだ。薄暗い穴の中を覗きながら、カリンは感慨に耽っていた。

「ここで、おばあちゃんはコディと居たのね？」

カリンもその中で体操座りをして、外を見た。覗き込んでいるコディを見て、ニッコリほほえんだ。

「改めてお礼を言つわ。おばあちゃんを助けてくれてありがとう」穴から這い出し、木を見上げた。

「カ力の木も、ありがとう！」

返事をするように、豊かな葉を貯えた木の枝が風に揺れた。

「…」

カリンと同時に、コディがピクツとなつた。

「来た…」

『ナキ…』

不安そうに寄り添うコディの前にしゃがむと、カリンは子供に言い聞かせるようにゆづくりと話した。

「いい、コディ。よく聞いて。今からあなたはここから離れて。私が、シーノかロックス、誰かがあなたを呼ぶまで出てきちゃダメよ。分かつた？」

『カリンはどうするんだ?』

「まだわからない。けど、あなたはここに居ないほうがいい気がするの。や、急いで隠れて！」

『カリン…』

コディは、フワッとカリンに抱きついた。

とても軽くて、少し温かくて、ほんのり土と葉の香りがカリンの

鼻をくすぐった。少し力を入れるとすぐに壊れてしまいそうなか弱い体。カリンは優しく抱き締め返すと微笑み、そつとその肩を抱いて体を離した。

「大丈夫。きっとうまく行くわ」

カリンは緑色の髪の毛を優しく撫でた。

「さあ

優しく背中を押すと、コディも素直にその場を離れた。ふわりと浮かび上ると、カリンの笑顔に微笑み返し、

『ありがとう』

と一言残して消えた。コディが消えた跡を少し名残惜しそうに

見上げたあと、カリンは振り払うようにきびすを返した。

「大丈夫。必ずうまく行く！」

ひとり頷くその目には、強い光が生まれていた。

「なんと、これは立派な大木ですねえ」

セツナを従えたクリスは、力力の木を見上げながら眼鏡の端を上げた。隣のセツナは気にする風もなく、黙つてうつむいている。赤い髪が顔を覆つて表情が見えないこともあって、不気味なイメージを与える。しばらく力力の木を見上げたあと、カリンに気付いたように視線を移した。

「おや、あなたは？」

両手を腰に当てて仁王立ちするカリンは、まだ何も言わなかつた。クリスは少しふつと笑うと、首を傾げた。

「耳が聞こえないのでしょうか。まあ、気にすることはないでしょう。」

クリスはそこにセツナを残して、力力の木の周りをゆっくり回り始めた。コダマを探しているのだろうが、姿を消している今、人の目には見えない。カリン自身にも、近くにいるのか遠くにいる

のかも分からなかつた。 ただ、むやみに姿を現さないで欲しいと
祈るばかり。 不気味に立つてゐるセツナを交互に盗み見ながら、
カリンは様子を伺つてゐた。

「……居ませんねえ。 知らせによれば、この辺りにいるはずなんです
すが……」

「あなたは、私たちの探し物が何か知つてゐるんですね？」

カリンは、気持ち悪いほどの微笑みを見せるクリスに嫌悪感を覺
えた。 問いに答えないカリンに、クリスは驚くほど冷静に話した。
「実際に見たことがないので、どんな姿をしているのか、想像出来
ないんですよ。 もしかしたら……」

クリスはカリンをじつと見つめた。

「「ゴダマはあなたかもしねない」

カリンは黙つてゐたが、眼鏡の奥に見える邪悪な光をしつかりと
捉えていた。

「「ゴダマとは、一体なんなのでしょうね？」

クリスは視線を反らせた。

「それは、どんな著書にも載つていない。 見たといつ記述だつて、
もしかしたら妄想でしかないかもしねない……」

カリンはクリスの心を読みあぐねていた。 これは独り言なのか、
聞かせたいことなのか……。 クリスは眩くように続けた。

「ですが、それが例え想像の産物であつても私は確かめたい。 私
に足りないものが、その時にきっと分かるはずだから」

そして、カリンをまた見やると優しく微笑んだ。

「「ゴダマとは、なんなのでしょうね」

クリスは穏やかな表情でカリンを見つめていた。 まるで心を見
透かそうとするようだ。

「……」

その静かな気迫に耐え切れなくなり、カリンは一步後退りした。
「ゴダマは、そんな大層なモノではないわ。あなたたちは、何か勘違いしてゐるんじゃない？」

「勘違い……ですか」

クリスは困ったように首をかしげた。そしてひとつため息をつくと、眼鏡を上げた。

「勘違いであつてもいいと思つてゐるんです。これは、私の夢のため」

「夢？」

「私だけでなく、ここに居るセツナさんや、もうすぐここに来るであろう仲間たちの夢を叶えるんです。」

「ゴダマはそんな神様みたいなこと、しないわ」

「ゴダマはどこにいるんですか？」

クリスはカリンの言葉を無視するように呟いた。穏やかな表情の向こうで、黒い瞳が光っていた。

「知らないわよ！ あなたたちがこの森に居るかぎり、ゴダマが現れることはないわ！」

「そうですか……では、これでは？」

クリスがふと右手を上げた途端、バンッという破裂音と共に、カリンの体が跳ねた。

「…」

思わず押された左腕からは、鮮血が流れた。

シーノたちの攻防

「あなたは、ゴダマの事をよく知つてゐるようですねえ。あなたが傷つけば、ゴダマも心配で出でくるんぢやないでしようか？」
憎たらしく微笑むクリスの後ろで、セツナが銃を向けていた。
その銃口からは煙が一筋上がつてゐる。クリスは優しく言つた。
「大丈夫。あなたを死なせる事はしませんから。あくまでも、ゴダマをおびき寄せるためのちょっとした罠ですから」

「こつんなどこで、ゴダマは現れないわよ！」

痛みに耐えながら、カリンは自身の腕を診た。

『かすつただけね。 アイツ、わざと…』

額に汗がにじみ出した。どう動けばいいのか……セツナは真つすぐにこじりを狙つてゐるし、何故かクリスからは隙が見えない。

『アイツ、一体何者なの？』

カリン自身、兵にはなれないとはいへ、それなりに訓練も積み実力を備えてきたと自負している。その目からも、今までたいした動きを見せたわけでもないクリスからは隙が見られないのだ。カリンは、ただ腕を押さえて立ちすくむしかなかつた。お互いが微動だにしない、緊迫した空気が漂つていた。その空氣に穴を開けたのは、またしてもクリスだつた。

「私たちは急ぎませんよ。 いざれゴダマを手に入れるのは私たちなんですから。 この張り詰めた空氣に押しつぶされる前に、楽になつたほうがいいと思いますがねえ」

勝ちを確信したかのようにニヤリと微笑むクリスの後ろで、セツナがしつかりと銃口をカリンに向けていた。

「……」

「 「？」

その時、クリスとセツナが何かを察した。 背後をチラツと一瞥したクリスは、にっこり元を上げた。

「やつと追いかけてますね」

カリンは即座にシーノとロックスの事を案じた。 それに気づいたクリスは、確信したかのように言った。

「やはりあなたは、あの兵士たちの仲間でしたか。 彼らも整理された今、あなた一人でコダマを守るなど無理だと思いますよ。 どうですか？ 私たちに協力するというなら、ひどい扱いはしませんよ」

「協力なんてまっぴらだぜ！」

「！」

クリスたちの前に現れたのは、彼の仲間ではなく、シーノだった。

「シーノ！」

喜びの声を上げたカリンに、シーノは明るく返した。

「お待たせ！ 途中何人か兵士がうろついてたから、掃除してきた。 大丈夫か？ ……！ ケガしてるじゃないか！」

腕を押さえるカリンを見てシーノは驚き、そしてクリスたちをにらんだ。

「お前ら、どこまでも非情だな！」

今にも飛び掛かろうとするシーノに、クリスは冷静に返した。

「もう一人、お友達が居ないようですが」

シーノはくつと息を詰めた。

「ロックスもすぐに追いかけて！ お前らはもう一人だけだ！ 観念するんだな！」

シーノは腰に装備していた剣を抜いた。 すると、セツナが音もなくカリンの背後に回って羽交い締めにすると、そのこめかみに銃口を当てた。 動けずにいるカリンの後ろで、セツナは変わらず無

表情だった。

「セツナさん、そのまま人質にしましょ」
につこりと微笑むクリス。

「卑怯な！」

唸るシーノに振り向くと、眼鏡をクイッと上げた。

「使えるものは使う。これは常識ですよ。あなたも覚えておくことです。さて、どうしますか？ 今すぐコダマをここに呼べば、お嬢さんはお返しします。出来ないのでしたら……分かりますよね？」

また、につと微笑んだ。息を呑むシーノに、カリンが声を掛けた。

「シーノ！ コディを呼んではダメ！ あたしの事はいいから、こいつらをやつつけて！」

強く押しつけられた銃口が、こめかみに食い込んだ。

「カリン！」

クリスはその様子を楽しそうに見つめている。

「可愛らしい事を言いますね。コダマを守るために、自分の命も厭わないとは。 そんなに大切ですか？ 自分の命よりも」

カリンは振り払うように叫んだ。

「勿論、命は惜しいわ！ だけど、あなたたちの餌になるくらいなら死んだほうがマシだわ！」

クリスは大げさに目を丸くしてみせると、鼻で笑った。

「はん。 まあいいでしょ。 その強がりも長くは続かないでしょうから。 さて……」

クリスはシーノを見やり、ご機嫌を伺つた。

「どうしますか？ このお嬢さんは命を捨てようとしています。あなたも同じなんでしょ？ ま、そんなことはどうでもいいんですよ。『コダマを手に入れる為に、私も苦労を積んできましたから』

シーノは、緊張感のない緩いクリスの口調に、いい加減に気分が

悪くなっていた。今ここで暴れても良かつたが、カリンを人質に捕られている以上、下手に動けない。シーノは一策を画した。

「……分かつた。コダマを呼ぶ。ただここでは場所が悪い。少し離れた所に泉がある。そこでコダマを呼ぶ。」

クリスはさも嬉しそうに顔を歪めた。

「やつと話が通じましたね。ではついていきましょう」

と言つて歩きだそうとするクリスについてカリンを従えて動こうとしたセツナを、シーノが制した。

「待て。人数が多いと恐がつて出てこないかも知れない。女は残つてもらおう。」

それを聞いたクリスは少し考えたあと、眼鏡を上げた。

「そうですか、分かりました。ではセツナさんはお嬢さんと一緒に、ここで待つていてください。ただ……」

レンズの向こうで、瞳がギラッと光った。

「三十分です。三十分経つても私がここに戻らなければ、お嬢さんの命は頂きます。それで、いいですね？私が自ら足を運ぶのですから、それくらいのリスクは、あなたがたも背負つて頂かなくては、平等ではありません」

半ば命令口調に少しイラついたシーノだったが、カリンたちと離れるのが狙いだったこともあり、なんとか平静を装つた。

「分かつた。その条件を飲もう。」

すると、カリンは心配そうにシーノを見つめた。察したシーノは、につと微笑んで見せた。

「大丈夫だ。すぐに帰つてくる」

そして、シーノとクリスは森の中へと消えて行つた。

セツナの葛藤とシーノの説得

残されたカリンの腕は相変わらずセツナに掴まれていたので、迷惑そうに言った。

「ね、そろそろ腕を離してくれない？ 痛いわ」

「だがセツナは黙つたまま答えようともしない。」

「ねえ、聞いてるの？ 今腕を離した所で、逃げたりしないし、あなたの腕前なら、走り去る背中を射ぬくのだって簡単でしょう？」
すると、セツナは何も言わずに掴んでいた手を緩めた。だが、銃口はカリンに向けられたままだ。カリンは腕をさすり、傷の様子を見た。痛みはまだ若干残っているが、出血が止まっていたので少し安心した。

「セツナさん…… つて言つ名前だつけ？」

カリンは、自分の腕の手当てをしながらカリンに話し掛けた。

「あたしはカリンよ。ね、聞かせて。あなたたちの目的は何？ 何故コダマがそんなに欲しいの？」

セツナは呟くように言った。

「願いを叶える」

「願い？」

「クリス様は数々の研究をしていらっしゃる。の方に間違いは無い」

片言のように呟くセツナ。まるで自分に言つていいようだ。

カリンは怪訝な顔をして尋ねた。

「セツナさん、あなたの願いは何？」

答えるように、セツナは首を大きく振った。今まで表情を隠していた赤く長い髪の毛が広がった。

「…」

カリンは思わず息を飲んだ。セツナの開かれた瞳は、本来何色かをたたえるソレとは全く違っていた。

「あなた、目が……？」

その瞳は、真っ白に輝いていた。セツナはまた顔を傾け、赤いカーテンを掛けた。

「生まれつき見えない。だから親にも捨てられた。助けてくださったのがクリス様。あの方の傍にずっと居させてもらつたから分かる。あの方に間違いなどない。『ゴダマに触れれば、この死んだ目が再び光を受けることができる』と、そう教えてくださつた」

「セツナさん、それは……」

カリンは言葉を失つた

セツナの境遇は、思うより深いものだ。真っ白な瞳で、真っ暗な世界を生き抜いてきたのだから。だが、医療に携わってきたカリンの知識をもつてしても、生まれつきの視力障害を治すすべは思い当たらず、ましてや、『ゴディにそんな治癒力があるとも信じがない。カリンは、とにかくセツナを説得しなくてはいけない』と思つた。きっと口先三寸のクリスにだまされていいるのだ。

「あなたの気持ちはすごくよく分かるわ。でも、……よく聞いて。正直、あたしは『ゴダマ』と会つたことがある。でも、『ゴダマ』は自然が形を作つて見せてるだけなの。誰かに傷つけられることがあっても、傷つけることはしないのよ。『ゴダマ』は見守るだけ。『そこに存在するだけ』なの」

セツナはじつと聞いていた。カリンはゆっくりと聞かせるように話した。

「だから、……セツナ、残念だけど、あなたの目が治るとは考えられない」

セツナはしばらく黙つていた。風の音が緑の香りと共に一人の間を通り過ぎた。カリンはじつとセツナを見守つていた。やがて、セツナは呟いた。

「嘘」

その手が上がり、銃口がカリンを捉えた。

「セツナ……」

カリンは切なさに胸が痛かった。何もしてあげられない自分が悔しかった。兵としても、医者としても中途半端な自分が、小さく思えた。だけど、これだけははつきりしているのだ。

「嘘じやないわ。もしコダマに治癒力があるなら、今だってシーノの傷を治しているはずよ」

セツナは小さく震えていた。まるでそれは自分と戦っているようだ……自分と向かい合つよう。

「嘘。クリス様は絶対……」

「混乱してるでしょうね……あなたはその命をクリスに助けられた。その恩返しをしたいと。その気持ちはよく分かるわ。だけど、そのために道を外れたら、何もかも台無しになつてしまつ。しつかりと真実を見るの。人一倍勘が鋭いあなたなら、それが出来るはずよ！」

セツナはグッと俯いた。そして、振り払つよう顔を上げると、引き金を引いた——。

パ——ーン！

「！」

シーノは驚いて振り向いた。そして、余裕顔でにやけているクリスに言つた。

「まだ時間じやないぞ！ どうじうことだ？」

クリスは肩をクイッと上げ、さあ？という表情をした。

「何かあつたんじやないでしょつか？ 隨分と勝ち気なお嬢さんのようでしたから」

ククツと含み笑いをして、まわりを見回した。

「ところで泉が見えてきませんが、まだですか？ あれからずっと歩き続けていますが」

「あんたは、仲間のことが心配じやないのか？」

「仲間？」

クリスはその言葉に笑った。

「仲間とは何ですか？ 私に仲間などいませんよ。 全て『道具』です。世の中は、是弱肉強食。弱ければ強いものに跪き、その全てを捧げることで、命を永らえることが出来るのです」

シーノは胸の内が極端に熱くなるのを感じた。抑え様のない怒りは、油を注がれた炎のように燃え上がった。

「お前は、人をなんだと思っているんだ。」

声は不思議と落ち着いたものだつた。だが、湧きだしてくる怒りは言葉の数ほどに増幅してくる。クリスはそれをなおも楽しむように、せせら笑つた。

「あなたもじきに私の前にひれ伏すのでしょうか。 さあ、ゴダマはどうこにいるんですか？ 答えなさい」

その瞬間、シーノは我を失つた。

「お前に会わせるゴダマはいねえ！」

シーノの拳がクリスの頬をとらえた……はずだつた。その拳は空を切つていた。

「？ なに？？」

同時に、目の前に居たはずのクリスが消えた。あわてて顔を上げると、背後に気配を感じた。

「！」

動きが止まつたシーノの耳元で、クリスがささやいた。

「あなたに勝算はないのですよ」

次に、シーノの脇腹に鈍痛が走つた。そしてその体が横殴りに

吹き飛ばされた。

「がつ！」

木の幹に叩きつけられたシーノの体は力なく座り込んだ。

「肋骨……逝つたかな……」

咳くと、なんとか顔を上げた。田の前には、ニシ「ひとつ微笑むクリス。

「お前……何者だ？」

「私は、この世の中を変えるために生まれてきました。」

「なんだと？」

「世界を一つにするためには、一つの巨大な力が必要なのです。私はありとあらゆる知識を手に入れてきました。体術も、必要なものだけ会得してきました。頭脳と強さがあれば、誰でも負けを認め、強いものに従づ。」

「何言つてゐるのか、全然わからんねえ」

シーノはフラフラと立ち上がった。それを気にもせず、クリスは話し続けた。

「私に従えば、人生の安泰を約束しましょう。『ドラマはそのせさやかな土台です。私の研究によれば、『ドラマは……』

「歌えば癒し、泣けば水晶……」

シーノが続けた。

「だがな、そんな便利なものなんてこの世には無いんだよ」

クリスは脇腹を押されて立つシーノを冷ややかに見た。

「でしたら、何故あなたがたは『ドラマを守ろうとしているのですか？　私たちと同じように、富や権力が欲しいからでしょう？』

「違う！」

シーノはキッとクリスをにらんだ。

「友達だからだ」

「友達？」

「利益や権力なんて関係ない。俺たちは、なんにも無くても幸せなんだよ。そこに居てくれるなら、幸せなんだよ。大事なのは、

心
だ
！

クリスの葛藤

クリスは、フフンと鼻で笑った。

「仲間だ友達だ心だと、そんなものはその場だけの、お互いを繋ぐごまかしのセリフですよ！ そんな蜘蛛の糸のような繫がりでは、すぐに切れる。 そして裏切り、時には牙を剥く。 私が求めているのは、もっと強い絆。 逆らい様のない強靭なもの！」

「だからといって、騙すのはよくないわね」

「！」

驚いたシーノの目に、カリンの姿が見えた。

「カリン！ 生きてたのか！」

「勝手に殺さないで！」

嬉しそうに言うシーノに、カリンが怒った。 その後ろから、セツナが姿を現した。 クリスはフンッと笑った。 そして

「！ カリン！」

と再度驚くシーノに、カリンは言った。

「大丈夫。 セツナさんは分かってくれた」

ニッコリと微笑むカリンに、セツナは俯いて不安げな表情をしていた。

「セツナさん、今の話を聞いていたでしょう？ 全て、クリスの本

音

カリンはクリスを見た。

「そうでしょう？」

セツナの心変わりを察したクリスは、あきらめたように肩をすくめた。

「お嬢さんもまた、語りが巧かったということでしょうか。 です

がセツナさん、あなたは大きな事を忘れていました

セツナは小さく顔を上げた。クリスの言葉を待っていた。

「親にも誰からも捨てられたあなたをここまで育てたのは、一体誰ですか？その命を消さずに済んだのは、誰のおかげですか？」

セツナはきっと顔を上げた。赤い髪がふわっと広がり、真っ白に変色している瞳に、シーノも気付いた。

「分からなくなりました。クリス様は私を助けてくださった。そして、世界を渡り歩くすべを授けてくださった。今まで私は、クリス様の為にこの身を捧げてきました。それが私に出来る限りのことでしたから。ですが……」

セツナは哀しげな表情をした。

「私たちが歩いてきた道は、本当に正しかつたのでしょうか？」

クリスの頬がピクッと痙攣した。セツナは続けた。

「この目が使えない私は、感じることに敏感になりました。人のわずかな動きで、その場所が分かれます。そして、その人の気持ちや心を感じることが出来ます。今までクリス様と共に旅をし、出会った人々は皆、クリス様に感じていた感情が同じだった。それは、『恐怖』」

カリンは見守るようにセツナを見つめていた。

「クリス様の周りには、いつもどこか怯えた空気が取り巻いていた。そして、クリス様。あなたはいつも、お一人でした」

「うるさいっ！」

クリスは叫んだ。セツナはピクッと怯え、後退りをした。だがすぐに顔を上げた。彼女の中で何かが固まっていた。毅然とした表情となつたセツナに、クリスは顔色を変えて怒鳴つた。

「一人で何が悪い？いや、私を独りにしたのは、お前たちじゃないか！散々頭が良いと褒めたあげく、自分たちより優秀だと気が付くと、今度は奇人を見るような目をした。そして愛想笑いをして遠ざかつていった！」

さっきまでの落ち着き払つた姿とは別人のように、クリスは胸の内を溢れさせた。

「私は一人で生きるすべを考えた。誰からも相手をされないのならば、誰もを凌駕する力を手に入れよう、そうすることで、人々は私に注目し、また私を敬愛する。そして後悔するのだ。私を変人扱いしたことを！」

「狂つてる……」

シーノは呟いた。クリスの暗く辛かつた時期を共感することはできないが、その気持ちはなんとなく理解できた。クリスは、注目を浴びたいがために力と知識を手に入れた。世界の頂点に立つために。

「クリス……」

カリンもまたシーノと同じだった。

「あなたは素晴らしい能力を持っているのは分かつたわ。そのために、人は敬遠し遠ざかった。皆、あなたが怖かつたのね。だけどあなたは、その力の使い方を間違えた」

「お前たちには分からん。私を見る目が、空氣さえ凍るような冷たいものだということを！ 私は歩み寄りつつした。だが、見えない壁が私の全てを拒否していた」

「分かります！」

セツナが声を上げた。

「誰からも相手をされず、一人で日々を過ごすつらさ。だからクリス様は、私を助けてくださった」

「助けた……だと？」

クリスの目が驚いたように見開かれた。

「クリス様は、感じたのです。私も自分と同じだということを。だからこの命を救つた。本当は、クリス様はお優しい方なんですね。本当は、人の命を大切に思うことが出来るのです」

セツナは懇願するように言った。カリンもクリスを見守つている。クリスは体を震わせた。

「私が人を助けただと？」

「私が優しい人間だと？」

クリスは混乱していた。

不意に、セツナと初めて出会った時のことを思い出した。

その日は雨がよく降る日だった。まるで太陽があるのを拒絶するかのようだ。空は真っ黒な雲に覆われていて、大粒の雨が家々の屋根や壁、道路に叩きつけていた。

時折、ゴロゴロとうなる空の下で、雨風にさらされ、服も体もずぶぬれの少女は、家の軒先で雨宿りをしていた。空を見上げることもなく、ただうつむいて微動だにしていない。赤い髪の毛はすっかり濡れ、束の先端からは絶え間なくポタポタと零をしている。不意にその家のドアが開き、住人が出てきた。

雨宿りの少女を見るや否や、何かどなりつけながらその細い体を蹴り飛ばした。

まるで雨の中を落ち葉が舞うようにその体は宙を舞い、水溜りのような道路へ投げ出された。水しぶきが雨の中に飛び散った。

住人はまた何かになると、ドアをドンッと勢いよく閉めた。

少女はようよと水溜りに膝をつき、そして、力なく座り込んだ。

クリスはその時、自分の部屋からその様子を見ていた。

勉強の合間に、ずっと続く雨にうんざりしている時に偶然見た光景は、まだ十代の心に深く突き刺さった。

思わず家を飛び出すると、少女に手を差し伸べていた。

少女はクリスの足元をじっと見ていた。歳は、クリスと同じか、少ししたくらいに思えた。

なかなか見上げようとしないので、クリスは少女の顔を覗き込むようにした。

「君……日が？」

クリスは衝撃を受けた。

周りが薄暗い中で、真っ白な瞳が異様に輝いていた。

少女はビクッとして顔をそむけた。

クリスは何も言わず、少女の腕をグッとつかむと、ゆっくりと抱き起こした。

驚いたように離れようとすると少女に、クリスは優しく言った。

「大丈夫だよ」

少女は抗うのをやめた。彼女の答えを待たずに、クリスは自分の家へと連れていった。

家族達は、クリスの横に立つずぶぬれの瘦せ細つた少女を見るなり、怪訝な表情を隠さなかつた。

だが、クリスは意に介さないようになにタオルを取り出し、少女の濡れた体をふいてやつた。

その様子を見ながら、父が眉をひそめて言った。

「まさかその子を泊めてくれ、とか言つんじゃあないだらうな？」「ダメですか？」

クリスが負けん気の強い目で言つと、父はなおも眉をひそめた。「どこの誰とも分からん、しかもそんな不健康そうなのを家のどこに寝かせるというんだ？ その性で家族が病気になつたりしたら、どうするつもりだ？」

その声に反応するように、上の兄が言った。

「俺は病気にはなりたくないな。知つてるか？ この頃、流行り病が広がっているらしいぞ。どんな薬も効かないんだと」

その時、髪の毛を拭いていた少女の瞳に気づいた妹が悲鳴を上げた。

「キヤアア！ その子、目が真っ白よ！ 化け物よ！ 気持ち悪い！」

「ナキア！ やめろよ、そんな言い方！」

クリスが叫ぶと、奥から母が飛んできた。

「何の騒ぎ？ クリス！ あなたは勉強さえしていればいいのよ。

そんな子は追い出して！ 早く部屋に戻りなさい！」

「そんな！ この子は、こんな雨の中を一人で彷徨つてたんだよ！ 何か温かいものを食べさせてあげるだけでも……」

クリスは言葉を途中で失ってしまった。

家族の目が、氷のように冷たい事に気づいたからだ。

クリスの腕に、冷たい感触がした。

「？」

少女が、すっかり濡れてしまつたタオルを押し付けたのだ。

クリスがタオルを受け取ると、少女は手探りでドアを開けた。

「ま、待つて！ まだ雨が降つてるし、止むまで居ればいいから」

少女はクルツと顔だけ振り向くと、口元をニーツさせた。 そして小さく

「ありがとう」

と呟くと一礼をして、雨の中へと消えてしまった。

「！」

クリスが家の外に出ると、少女は暗闇と雨の中に紛れて見えなくなつていた。

追いかけようとしたが、何故か体が動かなかつた。

後ろから兄の声がした。

「早く閉めろよ！ 雨が入つてくるだろ！」

「！」

キツと振り返ると、にやけた家族の顔が迎えた。 それが腹立たしくなつて、クリスは一気にまくしたてた。

「どうして追い出したんだよ！ あの子の事が可哀想だと思わないのか？ もし自分があの子だったら、どう思つて言つんだ！ たつた一晩、雨が止むまでも、泊めてやつたつて良いじゃないか！」 そんな勢いを無視して、妹は迷惑そうに答えた。

「私はイヤ！ あんな目、気持ち悪いわ！」

母も彼女の肩を抱いてクリスに言った。

「変な病気をばら撒かれて困るでしょ？ 私はね、家族を守ら

なくちやならないの。 分かるでしょ？ 頭の良いあなたなら。

「そうだぜ。 頭の良いお前なら、 なあ」

からかうように言う兄。

「逆に言つたら、 頭が良過ぎておかしくなったのかなー？」

するとすでにリビングに居る父が声を掛けた。

「賢けりやあ いいともんじやないんだぞ。 つたく、 どうしてこう育つちまつたのか……」

ぶつぶつ呟くように言う父の元に、 兄弟と母が寄り添つた。

ひとり玄関に残つたクリスは、 その様子を見ながら、 はらわたが煮えくり返つているのを感じた。

学校に入る前に行われた試験で、 ク里斯は人並み外れた知能指数があることが分かつた。 その途端、 ク里斯の周りは興味本位で集まる大人たちで埋め尽くされた。

そして、 その頭角が現れる頃には、 寄つて来ていた大人たちは逆に敬遠するようになつた。

大人たちの知識がクリスに追いつかなくなつたからだ。

そして、 次第に家族の方が彼を見下すようになつた。

やはり、 多人数という、 それなりの安心感が宿るのだろう。

ひとりだけの天才は、 血の繋がつた4人の並の人たちにさえ寄り添えない存在になつていた。

そこそこしつかりとして政治力を持つていたクリスの町では、 知識があればどこまでも上り詰めることができた。

そこにつけ込んで、 ク里斯は勉強漬けの日々を強いられていた。

それこそが正しい道だと教えられた。

目の前の家族達を見て、 強い孤独感に苛まれたクリスは決心した。

このままでは、人に押しつぶされる。

自分が例え権力者になつたところで、血縁関係のある家族はきっと、その欲を増幅させるに違いない。

それよりは、どこか自分を知らない人たちが居る場所でもう一度やり直そう。

無言で部屋に戻つたクリスは、数十分で荷物をまとめ、家族が寝静まつたのを確認すると、家を出た。

書き置き一つ残さなかつた。

外はまだ、雨が降りしきつていた。

どこか、雨風をしのげる場所を探して、もつ一度やり直そう。

まだ時間はたつぱりある。

どこか強い信念が宿り、クリスは歩を進めた。背負つたひとつ

の荷物と共に。

これも神の創つた偶然か。

クリスと少女は再びめぐり合つた。

先刻と同じようにずぶぬれで、木陰に身を潜めた少女の頭にタオルを被せたクリス。

「ボクと一緒に、行きませんか？」

少女は驚いたような表情をし、悲しそうに眉をひそめた。 そんな少女に、クリスは優しく言った。

「ボクと一緒に、やり直しましょう。 きっと、大丈夫です」

小さいけれど芯の通つた声だった。 少女は、黙つて頭の上のタオルで顔を拭いた。

「名前は、何と言つんですか？ ボクは、クリス・ゴードンと言います」

「……セツナ……」

セツナは、タオルで顔を隠すようにした。

「私、こんなですけど……」

クリスはフツと微笑むと言つた。

「私も、ですよ」

それからクリスたちは、小さな空き家を見つけると、新しい生活を始めた。 慣れない家事に、2人ともが戸惑つたが、ココから『自分の人生』が始まると思えば、少しも辛くは無かつた。

ある日買出しに出た町で、クリスは貴族のパレードに遭遇した。 煌びやかな装飾品に溢れた馬車。 それに前後して、何十人とい

うお付きの家来や兵士たち。

町の人々の全ての目はその行列に向けられ、感嘆の声を上げた。その行列の前に、ひとりの少年がふざけて飛び出した。

すると先頭の兵士が、

「行列の邪魔をするモノは、即刻切れと命令されている！」

と言うが早いか剣を抜き、その少年に振り下ろした。

声も無く倒れた少年に駆け寄る女性。母親だろうか。何度も何度も頭を下げながら、少年をひきずるように道路脇へと連れていく様子を、クリスは呆然と見ていた。

周りの人々も切った兵士に對して異論することもなく、何事も無かつたかのように淡々と行列が通り過ぎて行く。

豪華な馬車の中には、たっぷりとヒゲを蓄えている主人と見られる人物が見えた。妻らしき婦人と仲良さそうに微笑み合っている。先ほどの少年の事など、全く知らない。

長い行列が過ぎた頃、クリスの表情はすっかり変わっていた。

「強大な権力、強さのみが世界の中心……」

クリスの胸の内には、一国ではなく、世界規模で思いが膨らんでいた。

一国の何百という人を動かすことが出来るのなら、世界の何億という人をも動かすことが出来るはず。

クリスは確信し、それからは世界をひとつにするための土台作りをはじめた。

セツナに説明をしたわけではなかった。

が、彼女もまた、クリスの思いを感じ取ったように付いていった。

クリスが体術を学んでいる間、セツナは自分の勘の鋭さを磨き、銃の鍛錬をした。

2人が力を付けると、旅を始めた。

そして各地の用心棒を味方にして、裏の世界でも足を伸ばし、優秀な人材を誘つたり。とにかく欲しいもの、必要なものは全て

手に入ってきた。

クリスはその間、『淋しい』と思ったことは無かった。

家族と離れたことも、少しも後悔に思つたことはなかった。

自分の信じる道が正しいと信じ、ひたすら自分の力で突き進んできた。それ以上望むものはなかった。

そして気づけば……

そばにはいつもセツナが居た。

当たり前だつた存在が、今日の前に敵対している。

クリスは途端に怒りがこみ上げてきた。

「セツナ！ お前まで私をバカにするのか？ 私は間違つてなどい
ない！ 正しいからこそ、ここまで来れたんだ！」

「正しいか正しくないかは、お前が決めることじゃない」

シーノは言つた。体中がズキズキと痛む。

「お前がしてきたことは、セツナが全部見てきた。 彼女が一番、
お前の事を理解してる。 だから今までついて来たんだ。 だけど
人は、外の世界を知つた時に、初めて周りを、そして自分を見るこ
とが出来るんだ」

「それは、私が間違つていると、セツナが感じたといふことか？」

クリスはシーノをキッと睨んだ。

「お前は我を忘れすぎた。 自分のためだけに生きるのが本当の生
き方だとは思わない。」

「私もよ」

カリンも声をかけた。

「あたしは、別に友達や仲間じゃなくとも、周りの人たちには笑顔
で居て欲しい。 幸せでいて欲しい。 自分のためだけに人の幸せ
を奪うのは、良くないと思うの」

「カリンさんは……」

セツナは自分の体を抱いた。

「カリンさんは、私を抱きしめてくれました。 あの時、思わず銃
を構えてしまつて、外すのに精一杯で…… だけど、震えが止まら
ない私の体を、カリンさんは抱きしめてくれた。 そうして、『大
丈夫。 少しひっくりしただけよ、ね』と言つてくれた。 そうし
たら、何故か震えが止まつて、心が温かくなつて……」

「騙されるな！」

クリスは叫んだ。

セツナの体がビクッと震えた。

「お前はその女にたぶらかされているだけだ！ 第一、十何年と一緒に居た私よりも、ほんの数分話しただけの女の方が信じられるといつか？」セツナ、よく考えろ！」「……」

セツナはうつむいて手をギュッとつむつむした。カリンはセツナを守るように言った。

「セツナは人より感じやすいの。だからこそ、深いところにある真実の空気を感じることが出来るんだと思つ。真剣な思いを持っているのは、私もシーノも、そしてクリス、あなたも同じ。それを判断するのは、結局、受け取った本人なのよ」

シーノは腕をグルンと回した。

「そう。俺たちは、他人に自分を分かつてもらおうとしてる。お前もそうなんだろう？ 自分の欲を叶えようとしてる。どっちが強いかつてそれは、男なら分かるよな？」

痛みは残つているが、充分に体力は回復した。それを感じたクリスは、シーノに向き直つた。

「やはり、そうなるんですね。頭脳だけでは、世界をひとつには出来ない。それは知つていまつたが」

クリスは眼鏡を取り、懐に仕舞つた。

「では勝つた方が、この国を、そして『ダマを戴きます。いいですね？』

手首をクルクルッと回し、クリスはニーッと微笑んだ。

カリンは驚いて声を上げた。

「ちょ、ちょっと！ 話し合いで決めるんじゃないの？」「

「誰がそんな事言つたよ？ 男同士対面したらひとつ。どっちが

強いかは、実力勝負でしかないんだよ！」

シーノは意気揚々とクリスを睨んでいた。

クリスもまた、余裕の表情でシーノを見ている。

「ばっかじやないの？」

カリンの声にクリスが反応した。

「バカにするなっ！」

クリスはシーノではなく、カリンへと飛び掛った。

「！ カリン！」

シーノが駆け寄ろうとした時ー

パーーーン！

「！」

思わず目をつむったカリンの上に、クリスの体がのしかかった。

「クリス様！」

セツナは膝ごと滑り込んで、倒れたクリスの体を抱き起こした。その胸には、赤く穴が開いている。それは瞬く間に赤く広がった。

「クリス様！ ごめんなさい、やつぱり私……」

足元にセツナの銃が転がった。その銃口からは白煙が上がっている。

「セツナ、あなた……」

呆然と言つカリンを見ず、セツナはうつむいて言った。

「私は信じたい。私が本当に信じたいと思うことを、信じたい。

カリンさんがくれた温もりを……」

「セツナ……」

クリスが弱々しく声を出した。

「そうか……君もまた……私とは違っていたんだな」

「クリス様、違います……人は皆、違う生き物なんです。

でも、

違うからこそこうして、一人でやって来れたんです

「解りあつて いると、思つて いた……」

クリスは微笑んだ。

「天才とは、大変なものだな。 今度生まれ変わつたら、普通の人になりたい……」

クリスの息が途切れ途切れになり、セツナは悲しい声を上げた。その真っ白な瞳から、涙が一筋流れ、クリスの頬に落ちた。

「セツナ……泣くな。あの時、雨の中で出会つた時、私は何故かお前に惹かれた。それがどういうことなのかずっと分からなかつたが……セツナ、私は……お前と一緒に居られて……幸せだつたんだな……」

クリスの指がセツナの頬に触れた。

「セツナ、頼みがあるんだが……」

「何ですか……？」

涙声のセツナに、クリスは声を振り絞つた。

「最後に……抱きしめてくれないか？」

セツナは黙つて、ゆっくりと優しくクリスの体を抱きしめた。冷たくなつていく指先をセツナはギュッと握つた。

「セツナ……ありがとう……」

彼女の耳元で囁いた。

最期の言葉だった。

シーノとカリンは、静かに二人を見守つた。

絆が生まれた時

セツナは、じばりくしてゆづくとクリスを寝かせると、おもむろに銃を拾つた。

そして、それを躊躇なく自分のこめかみにあてた。

「！ ちょっと！」

「終わり！」

驚いて止めようとするカリンを、セツナは制した。

「何もかも、終わったわ。 私とクリス様の旅はここで終わった。 結局何も残らなかつた。 私達の道はここで終わったの」

「セツナ！」

「カリンさん、最後に目を覚ませてくれて、ありがとう。 だけど私は、あなたのようにはなれない。 ただクリス様の足を止めることが出来なかつた。 でもこれで良かつたのかもしれない。 私も、今まで何人もの幸せを奪つてきた。 罪は償います」

セツナは引き金に指をかけ、力を込めた。

パ――――ン！

銃声が森の中にこだました。 何羽かの鳥が木々から飛び立つた。

「セツ……ナ……？」

目を見開くカリンの前には、セツナの手にからみつてゴディの姿があつた。

「ゴディ！」

シーノが驚きの声を上げると、ゴディの体はセツナの手から離れ、地面に落ちた。

急いで抱き起したシーノの腕の中で、コディは力なく体を預けた。

「何で出てきた！」

シーノ……

その胸に、丸く穴が開いている。不思議と、穴の周りがぼやけて見える。コディはか弱い声を出した。

もう誰も死んじゃいけない。生きることは尊いことだから……

「コディ、セツナを助けようとして……？」

カリンが震えながら跪いた。

呆然と立っていたセツナが呟くように言つた。

「コダメ……？」

見えないが、気配と二人の会話で感じたようだ。彼女もまた、コディの傍に跪いた。

「私を……？」

人も森も同じ。大切な命だ。そんな大切な自分の命を捨てちゃだめだ

「コディ！だからってその身を使ってかばうなんて……！」

カリンの瞳から涙が零れ落ちている。シーノも悲痛な思いでコディを抱えている。

「コディ！力の木に行こう！きっとまた治してくれる！」

立ち上がるうとするシーノの腕を、コディはギュッと掴み、首を横に振つた。

「コディ、鉄とか鉛が苦手なんだ……

「こんな時に冗談言うなよ！」

重さを感じるハズのないコディの体が、とても重く感じられた。

「……ウソだろ？コディ！また遊ぼうぜ！もう悪い奴らは居なくなつたんだ。これから遊び放題じゃないか。森の中、また一緒に走り回るうぜ、なあ！」

「ゴディは力なく微笑んだ。

うん、楽しかったよ。シーノ、カリン、それに、ロックス……
「ロックス！ そう言えれば、まだここに来てない！」

カリンが弾けたように顔を上げた。

「ゴディは彼女の方を見た。

ロックスはちゃんと生きてる

その時、ガサガサッと草むらが揺れ、巨体が姿を現した。
その肩には、氣を失ったような兵士が担がれている。

「「ロックス！」」

シーノとカリンが同時に声を上げた。

「まだちょこまかと兵士らがうろついてな、掃除していたら遅くなっちゃった……！」「ゴディ！」

ロックスはシーノの腕の中の「ゴディ」に気づいて驚いた。

そして、傍に跪いて呆然としているセツナにも気づくと、肩に担がれた兵士を放り投げ、剣を向けてた。

「お前かあ！」

カリンが急いで止めた。

「違うのロックス！ セツナを守るうとして、ゴディは……
「何だつて？」

状況を把握できず戸惑うロックスに、カリンが言った。

「詳しい話は後で。とにかくゴディを助けるのが先決よ！」

ロックスもまた、ゴディの傍に寄り添つた。その背中が真っ赤なことに気づいたカリンが驚いた。

「何、この出血！」

するとロックスは、

「こんなのは後でいい！ ゴディの方が先だ！」

よく見れば、真っ青な顔をしているロックス。心配に思いながらも、カリンはゴディの方に向き直した。

「ゴディ！ 何か手はないのか？ 薬草とか、何か必要なものがあ

れば、言つてくれ！」

シーノは必死で声を掛けた。 今にも目をつむりそうな状態に、皆動搖していた。

「ゴティは必死に薄目を開けて言つた。

皆、ありがとう。 森は守られた。 力力の木も喜んでる。 これからも、森は人々を、動物達を見守る。 未来永劫、変わることなく、見守り続ける

うわごとの様に呟くゴティ。

そして、フウッと大きく深呼吸すると、そのままゆくつと息を吐きながら目をつむった。

安らかな眠りにつく子供のようだった。

「　「　「ゴティヤー。」「　」

皆の声も空しく、ゴティの目が再び開くことはなかつた。そしてその体は、シーノの腕の中でフワントボヤケ、次にジンワリと水の固まりになると、バシャンッと地面へとこぼれた。

「体が水に……？」

戸惑うシーノの足元が滲み出した。

そして、コンコンと湧き水があふれ出してきた。

「これは……」

動搖するロックスの言葉に、カリンが思い出すよつて言つた。

「歌えば癒し、泣けば水晶、死して泉……」

「泉……」

シーノが呟いた。

「ゴティは、泉になつて生き続けるのね。 ここに居て、私達を見守ってくれる……」

カリンが愛おしそうに湧き水をすくつた。

まったく濁りの無い透明な水が、いつの間にか昇つて、陽の光を反射して、キラキラと指の間を零れ落ちた。

それを見ながら、シーノは落ち着きを取り戻した。

「さうか、そういうことか！」

「いきなりシーノが明るく言ったので、ロックスが怪訝な顔で聞いた。

「どうこうことだよ、シーノ？」

シーノは嬉しそうに言った。

「この森に点々とある泉。あれはきっと、歴代のコダマが眠る場所なんだよ。何らかの事情でコダマが死んで、その後、またコダマが生まれる……」

カリンも微笑んだ。その頬には、涙の後が付いたままだ。

「そうね。次のコダマも、可愛くて面白い子がいいわね」

「はあん、そういうことか」

ロックスも納得したようにうなづいた。

シーノは立ち上がり、今度は真面目な声で言った。

「だけこの泉は、俺たちにとって一番大切なコダマの眠る場所だ」

「ええ、私達にとつては特別な……」

カリンとロックスも頷いた。

三人は立ち上ると、目を合わせた。

その瞳には、固い絆が宿った事を意味する光が生まれていた。

新王国ゴディアルが誕生して五年が経つた。

サーディヤ城を取り壊し、新しい城が森の中に建設された。その整然とした縁豊かな庭の中央には、石の彫刻で綺麗に周りを囲まれた小さな泉があつた。

コンコンと湧き出る水は、年中その潤いを保ち続けている。その周りを、楽しそうな笑い声をあげながらグルグルと走り回る男の子。

まだ3歳になつたばかりの元気なその子は、やがて近づいてきた父親の腕に抱かれた。

「こら。あまり走り回ると、転んで怪我するぞ」

困り顔で言う父親は、シーノ・ソラー・オ、その人だつた。しっかりと蓄えたヒゲが少し不釣合いだが、瞳に光る志は五年前と同じだった。

「おろして！ おろして！」

もがく子の拳がシーノの頬に当たり、ひるんだうちにその腕をすり抜けた子供は再び走り去つた。

「何であいつはあんなに元気なんだ？」

「あなたに似たのよ」

微笑みながら寄り添つたのは、カリンだつた。

だいぶ成長して顔つきが女らしくなり、化粧も覚え、綺麗に着飾つている。

「ゴディにも似たのかもね」

そう言つて笑うカリンの後ろに、赤髪のセツナが現れた。

「シーノ様、親衛隊一番隊隊長ロックスが広間に着きました」

「うん、分かった。ありがと、すぐ行くよ」

シーノが微笑んで答えると、セツナは一礼して城の中へと入つて行つた。

その後ろ姿を見送りながら、感心したように言った。
「しかし大したもんだよな、見えないのに、何で段差とか分かるんだろう？」

するとカリンはからかうように笑つた。

「セツナはあなたと違つて神経を研ぎ澄ませてますからね。 それにもあの時、声を掛けて正解だつたわね。 結構しつかりしているし、頼りになるし」

「んだよ！ お前だつて、自分のドレスにつまずいてたじやねーか！」

「なによつ！ あなただつて自分のマント踏んでたくせにつ…」
小競り合いをする2人の間に愛息が割り込み、見上げた。

「ボクも入れて」

純粹で眩しい笑顔は、喧嘩を治めるのには充分すぎた。

「ああ、パパはこれから仕事だから、ママと遊んでもらいなさい」
そしてグリグリッと頭をなでて頬にキスをすると、カリンに
「じゃ、行つてくる」
と声を掛け、城へと入つていつた。

庭に残されたカリンは、しゃがんで息子と同じ視線になると、にっこりと微笑んだ。

「あなたにも話さなくてはね。 パパが守つたこの国と森のこと。
そして、この泉のこと」

「？」

きょとんとする顔は、純粹なあのゴトイを思い出す。

シーノはこの国の王になつた。

クリスが思い描いていたような、権力で人を押しつぶすソレではなく、シーノが大好きだった町の人々や森が幸せであるように。そう願いながら、共に過ごすことを選んだ。

もうすぐこの庭も開放する。

この城の大抵の場所から、泉を見ることができる。

吹き抜けた広間の柱の隙間を、森の香りがする風が流れ渡る。

親衛隊一番隊隊長となつたロックスは、今までの兵の一番前に立つて剣を振るつてゐる。

動いていないと気が済まないのは、今でも同じのようだ。

そんなロックスもまた、シーノの横で泉を見つめていた。

「なんだか、夢を見ていたような気がする」

「ああ、目まぐるしかつたからな。全てが大きく変わつた

「苦しくはないか?」

ロックスは泉を見つめたまま言つた。シーノは、彼の言いたい事を理解した。

「正直、今の俺には重すぎるよ。 だけど、俺は一人じゃない。カリンも、息子も、お前も居てくれるし、セツナや家臣たちも頼りになる。 皆と一緒に乗り越えて行けると思ってる」「強くなつたな、シーノ」

シーノは照れたように鼻をすすつた。 そんな所はまだ幼い。「違うわ。 皆のおかげだ。 それに……」

泉は陽の光に彩られて輝いている。

「ゴディのおかげだ」

ロックスはたいした意見だ、と一息ついて、姿勢を正した。

「俺は、シーノ王に付いていくぜ!」

「やめろ、くすぐつたい!」

笑つて言い合つ二人は、また一兵士だつた頃に戻つたかのようこ見えた。

その二人に気づいた息子が、カリンの手を振り切つて広間へと駆

けて來た。

向かつてくるその子を優しく見つめるロックス。

「そつくりになつてきたな」

「そうか？」

「元氣いっぽいだつたもんな、俺と初めて会つた時……」

「……そうだな。両親が戦場で死んで一人になつて、拾われたサージヤ王に少しでも恩を返したくて、ひたすら強くなろうと必死だつた。元氣にしてるしか仕方なかつたよ。あの頃は……生きることに必死だつた」

シーノは笑顔で言つた。

「ロックス、兄弟つて、いいもんだな」

すると彼は、照れたように返した。

「俺は何もしてないぞ。逆に感謝してるくらいいだ」

ポスツと胸に飛び込んだ息子を軽々と抱き上げると、シーノは微笑んだ。

「どんな事情があろうと、この子には、淋しい思いはさせたくない」
カリンも急いで追いかけてきた。長いドレスがうつとおしそうで、思わずロックスは吹き出した。

「ごめんなさい、お邪魔しちゃつて……」何で笑つてゐる、ロックス？

「いや、なんでも」

同じように笑うシーノから息子を受け取り、カリンは庭に向かつた。

「ほら、お庭に戻るわよ、ゴディイ」

ゴディイは母を見つめ、そして一人に振り向いた。

最高の笑顔を見せたゴディイを守り抜こうと、二人は心に誓つてい

た。

いつまでも輝く『ゴーティの泉』と共に。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6998m/>

コディの泉

2010年10月8日14時01分発行